琉球大学学術リポジトリ

大学生の適応に関する心理学的研究　－琉球大学の新入生を対象として－

メタデータ	言語:
	出版者: 琉球大学法文学部
	公開日: 2010-02-15
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 中村, 完, 新里, 里春, 島袋, 恒男, 井村, 修, Nakamura, Tamotsu, Shinzato, Rishun, Shimabukuro, Tsuneo, Imura, Osamu
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/15508

大学生の適応に関する心理学的研究
――琉球大学の新入生を対象として――

中村　完　新里里春
島袋恒男　井村　修

Ⅰ　序

本学は全国最南端の国立大学であり、東南アジア地域との学術的交流や海洋関係の学科など他大学にない特色豊かな大学である。本土復帰以前は、ほとんど学生は県内出身者であったが、国立大学移管後しだいに本土出身者も増加してきた。現在、本研究の対象となった60年度入学者の県内出身者の全体に占める比率は、64.6％であり他の地方国立大学と同水準になってきているようである。県外出身者には、本学独自の専門コースを主体的に選択し進学してきたため勉学への意欲の高い学生が多いといわれる反面、共通１次試験導入後他の地方国立大学でも指摘されているように、偏差値による輪切り現象が明確になり、県外からの不本意入学者が増加してきているともいわれている。入学後、大学や学部の選択に関する悩みで、保健管理センターに来談する本土出身の学生も比較的多くみられる。彼らにとって大学選択の主要な基準は、共通１次の得点となっているようであり、いわば消極的進路決定を行ってきたものと考えられる。彼らの中には不本意入学から大学になじめず、他大学を再受験するエネルギーもなく、留年をくりかえし退学となったケースもある。大学入試制度が存続する以上、不本意入学者が生まれる可能性は常に存在するが、その人数や質は入試制度の変更や社会的要因の変化にともなって変動するものであろう。

ところで、不本意入学という用語が、いつごろから使用され始めたのか明確ではない。土川（1980）は、大学生のうつ状態をひきおこす要因として、不本意入学者の問題を論じている。また鶴（1981）は福岡教育大学における不本意入学者の分析を行い、その要因として「学力不足」（入学者

の６～９％）、「親の強いすすめ」や「教師のすすめ」（入学者の５％前後）、「経済的理由」（入学者の７％前後）などをあげ、入学者の20％前後が不本意入学者であることを指摘している。いずれにしろ共通１次試験導入前後から、不本意入学者なる用語が使用され始めたものと推定される。おそらく、国立１期校、２期校の制度が廃止され、国立大学の複数校受験が困難となり、受験生の安全志向が強まり、本来進学を希望していた大学より入学しやすい大学を選択したことも関連性があるものと思われる。残念ながらそのような学生についての、継続的な調査は今までに行われていないために、共通１次試験の導入によって何がどのように影響を受けてきたのか明確でない。特に心理的・精神的な健康の観点からの資料は少なく不本意入学者の大学適応上の問題についての検討は必要と思われる。

そこで、共通１次制度の利用をめぐって、大学入試制度が大きく変ろうとしている現時点で、不本意入学者や適応上の問題があると考えられる学生の実態把握、ならびに入学生の健康、適応に関する心理学的な観点からの調査研究は、重要な課題である。さらに、このような基礎的な資料を蓄積することは、問題を有する学生への有効な指導指針を得るとともに、本学の学生像や学生気質を理解する点で有益であろう。

本研究では、従来から実施されていた保健管理センターの呼び出し面接用の調査票（Ｑ１～Q100）に大学適応などに関する追加項目（Q101～Q116）を新たに設け、入学生にこれを実施し本学の学生の適応上の問題を明かにすることが、主要な研究目的である。とりわけ、不本意入学者（便宜上、第２志望者を不本意入学者と考える）の問題を中心に、性別、学部、出身地域などのデモグラフィック要因に関して検討する。また、各変数間の関連性をみるために数量化理論による分析検討を行なう。

Ⅱ　方　法

調査対象　昭和60年度入学の琉球大学の学生1113名。入学者数は1407名（再入学者は除く）であり、回答率は79.1％であった。法文、教育、理、医、工、農の各学部と短大部の全学部生が調査対象であった。

調査手続　体育館での入学オリエンテーションの時に調査票を配布し、その場で記入させ、回収した。

調 査 票　昭和59年９月まで保健管理センターのカウンセラーであった新里里春（現在教育学部助教授）が、入学時の呼び出し面接用の調査票として使用していた、100の精神、身体に関する質問項目に、新たに16の大学適応についての質問項目を追加したものを使用した。調査票※は、Ｑ１～Ｑ６：病歴、Ｑ７～Q21：ヒステリー、Q22～Q31：不安、Q32～Q42：心気・恐怖・強迫、Q43～Q51：うつ、Q52～Q58：分裂、Q59～Q91：身体・心身症、Q92～Q100：脳器質障害、Q101～Q116：大学適応の計116の質問項目から構成されている。

結果の処理　本研究では健康・適応調査の結果についてANALYSTにより各項目×学部、各項目×性、各項目×出身地、各項目×第１志望の２重クロスの応答分布表を作成した。また大学適応項目、不安、心気症項目および心身症項目については、数量化第Ⅲ類による分析を行なった。

Ⅲ　結果と考察

Ⅲ－１　全体的結果の傾向

Ｑ１～Q116の全質問題項目についての「はい」と回答した者の数と回答率は、表１に示されている。この中で50％以上の者が「はい」と答えた項目は、Q19「よくいろいろなことを空想して楽しむ」Q32「自分の身体や病気のことに非常に関心を持っている」Q47「決断力がにぶってあわせこれやと迷う」Q76「目が疲れやすい」という４つの精神、身体項目であった。Q101「本学は第１志望の大学」Q102「希望した学部に入学した」Q103「希望した学科に入学した」Q104「大学には希望を持って進学した」Q105「志望校の決定は自分でした」Q108「授業について不安がある」Q

※質問項目の内容とそれに対する「はい」の男女別、全体の回答率を資料として巻末に掲載した。

109「学生生活で勉学は重要である」Q110「サークルに入りたいと思う」Q111「友人はすぐにできると思う」Q113「この調査の結果を知りたい」Q114「入学後の目標はある」Q115「卒業後の職業は考えている」Q116「相談室を利用したい」という13の大学適応の項目についても50％以上の者が「はい」と答えていた。さらに40％から50％の者が「はい」と答えた項目は、精神、身体項目ではQ11「自分の思うようにならないと、いらいらしたり、カッとなったりする」Q12「自分のやったことに自信が持てない」Q17「わがままなところがある」という３項目で、大学適応項目では、Q106「学生生活に不安を感じる」という１項目であった。

以上のような、比較的多数の者が「はい」と回答した項目から、全体的な特徴を推定すると、精神、身体項目においては、自信のなさ自己中心性、健康への関心、疲労感などであろう。このような回答傾向が、学生本来の心身の状況を反映しているのか、入学直後の新しい環境に対するとまどいを示しているのかさらに検討していく必要があろう。また大学適応の項目からは、本学が第１志望の学生が60.1％で、希望の学部に入学した者87.7％、希望の学科には82.6％の者が入学していることがわかった。第１志望率にくらべ、希望の学部、学科に入学している率が高率であるのは、76.8％の者が卒業後の進路まで考えていると回答していることからも推定されるように、比較的多数の者は専門性を中心に大学を選択しているものと思われる。89.3％の者が大学に希望を持って進学し、志望校の決定は自分で行う傾向が強い（93.5％）。しかし半数近くの者が、授業（57.3％）や学生生活（43.8％）に不安を感じていることがわかった。勉学（96.6％）サークル（76.0％）や友人（83.4％）なども重視されていることがわかった。84.3％の者は入学後も目標があると答えていた。大学適応項目の回答傾向からは、比較的多数の者は大学生活などに不安を感じながらも、希望を持ち大学で勉学やサークル活動に取り組もうと考えているようである。しかし大学に希望を持てない者が、約10％、入学後の目標がない者が16％いることは、注目すべき事実であろう。どのような学生がそのような回答をするのか、不本意入学との関連から今後検討していきたい。

表1．各質問項目に対する回答者数と回答率

項目	はいの人数	回答率(%)	項目	はいの人数	回答率(%)	項目	はいの人数	回答率(%)	項目	はいの人数	回答率(%)
1	431	38.4	31	249	22.2	61	268	23.9	91	95	8.5
2	248	22.1	32	590	52.6	62	72	6.4	92	209	18.6
3	17	1.5	33	167	14.9	63	166	14.8	93	144	12.8
4	5	0.4	34	69	6.1	64	80	7.1	94	292	26.0
5	57	5.1	35	213	19.0	65	61	5.4	95	44	3.9
6	224	20.0	36	183	16.3	66	105	9.4	96	48	4.3
7	84	7.5	37	239	21.3	67	66	5.9	97	6	0.5
8	221	19.7	38	258	23.0	68	98	8.7	98	27	2.4
9	402	35.8	39	192	17.1	69	21	1.9	99	27	2.4
10	674	60.1	40	260	23.2	70	39	3.5	100	211	18.8
11	507	45.2	41	400	35.7	71	38	3.4	101	674	60.1
12	476	42.4	42	191	17.0	72	83	7.4	102	984	87.7
13	252	22.5	43	215	19.2	73	137	12.2	103	927	82.6
14	272	24.2	44	62	5.5	74	29	2.6	104	1,002	89.3
15	302	26.9	45	17	1.5	75	359	32.0	105	1,049	93.5
16	303	27.0	46	82	7.3	76	590	52.6	106	491	43.8
17	549	48.9	47	594	52.9	77	108	9.6	107	223	19.9
18	110	9.8	48	33	29.7	78	94	8.4	108	643	57.3
19	655	58.4	49	78	7.0	79	81	7.2	109	1,084	96.6
20	197	17.6	50	54	4.8	80	101	9.0	110	853	76.0
21	314	28.2	51	36	3.2	81	45	4.0	111	936	83.4
22	330	29.4	52	90	8.0	82	169	15.1	112	386	34.4
23	393	35.0	53	138	11.4	83	259	23.1	113	663	59.1
24	226	20.1	54	193	17.2	84	169	15.1	114	946	84.3
25	113	10.1	55	302	26.9	85	420	37.4	115	862	76.8
26	42	3.7	56	369	32.9	86	142	12.7	116	725	64.6
27	86	7.7	57	417	37.2	87	288	25.7			
28	162	14.4	58	192	17.1	88	13	1.2			
29	40	3.6	59	94	8.4	89	116	10.3			
30	254	22.6	60	64	5.7	90	123	11.0			

Ⅲ－２　デモグラフィック要因による分析

ここでは各質問項目についての「はい」の回答率に基づき、大学生の性別、学部別、出身地別、志望別等のデモグラフィック要因によって、結果を分析、検討していく。

１）性別比較

（１）大学適応に関する項目について

大学適応に関する質問項目は、101番から116番までの16項目である。これら項目の中で、男女間の回答傾向に有意な関連性が認められる（χ^2検定、$P<.05$）項目は、次のようなものである。まず、女子の回答率が高い項目として、項目101の「本学は第１志望の大学であった」（男54.7％：女、70.5％）項目103の「希望した学科（課程）に入学した」（男、79.7％：女、88.3％）、項目104の「大学には希望を持って進学した」（男、87.5％：女、92.7％）、項目105の「志望校の決定は自分でした」（男、92.1％：女、96.1％）、項目108の「授業についての不安がある」（男、54.4％：女、62.9％）、項目109の「学生生活で勉学は重要だ」（男、95.4％：女、99.0％）、項目113の「この調査の結果を知りたい」（男、56.1％：女、64.8％）、項目115の「卒業後の職業は考えている」（男、74.4％：女、81.5％）等が挙げられる。他方、男子の回答率が高い項目は、107の「沖縄という風土に不安を感じる」（男、22.6％：女14.9％）であった。

一方、男女間の回答傾向に有意な関連性は認められないが、男女ともに高い回答率を示している項目は、102の「希望した学部に入学した」（男、86.9％：女、89.3％）、111の「友人はすぐできると思う」（男、81.8％：女、86.7％）、114の「入学後の目標はある」（男、83.3％：女、86.2％）等であった。男子学生に比べ女子学生の場合、概して琉大を第１志望校として受験し、希望した学部、学科に入学していることが分かる。反面、男子学生は女子学生に比べ琉大を第１志望校として、選択する割合が低かったものの、しかしながらある程度まで希望した学部、学科に入学していることがうかがえる。男子学生の場合、「沖縄という風土に不安を感じる」の項目で、女子学生に比べ高い選択率を示している。このことには、男子に沖縄県外

出身者の割合が多いということが起因していると考えられる。また、このようなことは男子の「本学は第1志望の大学であった」項目の選択率の減少に関連していると解される。

上述のように、項目によっては男女間の選択率に差が認められるが、全体的には男女とも大学に希望を持って進学し、入学後の目標もあり（項目114、男、83.3%：女、86.2%）、卒業後の職業も考えていることになる。このような結果から判断すると、大学生は入学時に大学に対し期待と積極的態度を持っていることが一応理解できる。しかしながら、反面、学生は入学に際し、選択率は若干低くなっているが、学生生活に不安を感じ（項目106、男、43.0%：女、45.2%）、授業についての不安をもち、また、何か悩み事をもっており（項目112、男、34.7%：女、33.7%）、大学に対し不安と消極的態度を持ち合わせていることがうかがえる。いま、学生の期待、積極的態度に関連する3項目の合併選択率と、不安、消極的態度に関連する3項目の合併選択率をそれぞれ算出し示したのが図1である。

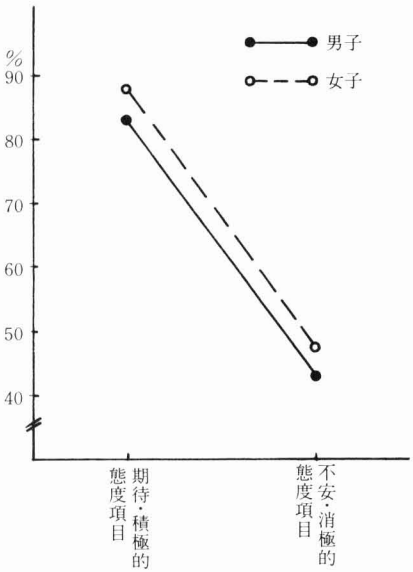

図1　大学適応項目の性別比較

図１の結果から、入学時に男女学生がともに、大学生活にアンビヴアレンスな態度をいだいていることが推考出来る。なお、アンビヴアレンスな態度は女子学生の方が若干強い。大学生活に対する両価性的態度を持つが故に、相談室を利用したい（項目116、男、62.6％：女、68.7％）、という学生が６割も出現するのであろう。

（２）病歴に関する項目について

各人の病歴に関する項目は、１番から６番までの６項目である。家族の精神的障害に関する回答率（項目５、男4.8％：女5.7％）は、男女とも低い方であった。この結果に比べ、学生自身の過去の問題的行動の有無についての項目に対する回答率（項目２、男、22.3％：女、21.9％）は、男女とも若干高くなっている。しかしながら、このような幼少時の問題的行動は、項目３の「ひどいノイローゼにかかったことがある」の回答率（男、2.3％：女、０％）や項目４の「精神病にかかったことがある」の回答率（男、0.7％：女、０％）等から考慮すると、学生のその後の大きな精神的障害にはほとんど結びつかなかった、と解される。

一方、図２に示されているように、男子学生の４割、女子学生の３割が、自己を神経質な方と認知している。なお、男女間のこの回答傾向には有意な関連性が認められる。項目１、３、６等の回答結果から、この領域において、女子学生に比べ男子学生の方が自己をネガテイヴに認知していることが示唆される。

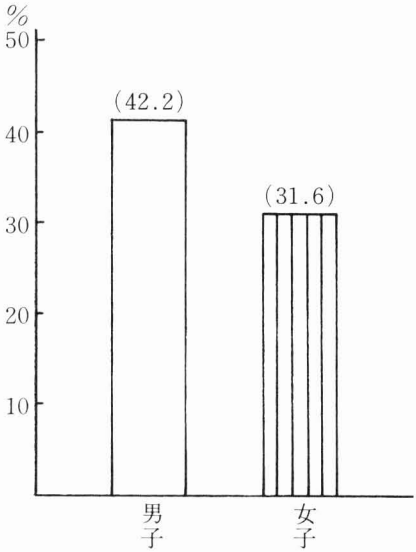

図 2 「神経質な方」と回答した結果の比較

（3）ヒステリー的特性項目について

項目 7 から項目21までが、ここでの対象項目である。男女間の回答傾向に有意な関連性が見られる項目の中で、女子の回答率が高い項目は、項目10の「何事によらず相談相手がほしい」（男、57.4％：女、65.0％）、項目12の「自分のやったことに自信がもてない」（男、38.4％：女、49.6％）、項目17の「わがままなところがある」（男、46.0％：女、54.6％）等である。他方、男子の回答率が高い項目として、項目20の「すべて大げさに考えたり、反応する」（男、19.7％：女、13.6％）、項目21の「自分を実際以上に立派にみせたがる」（男、30.1％：女、24.3％）等が挙げられる。項目10や項目12、それに項目16「暗示にかかり易い方である」（男、25.9％：女、29.5％）等は自己欠如性に関する内容項目と考えられる。一方、項目20と項目21は自己顕示性に関する内容項目と考えられる。そこで、前者の 3 項目を合併して回答率を算出し、同様に後者の 2 項目を合併し回答率を算出して男女別に示したのが図 3 である。図 3 の結果から、自己欠如性の項目

において、女子の方が有意に高く、逆に自己顕示性の項目では男子の方が有意に高くなっている。また、男女間の回答傾向に有意な関連性は見られないが、項目19の「よくいろいろなことを空想して楽しむ」（男、57.1％：女、60.3％）の回答率は、男女とも高い値を示している。

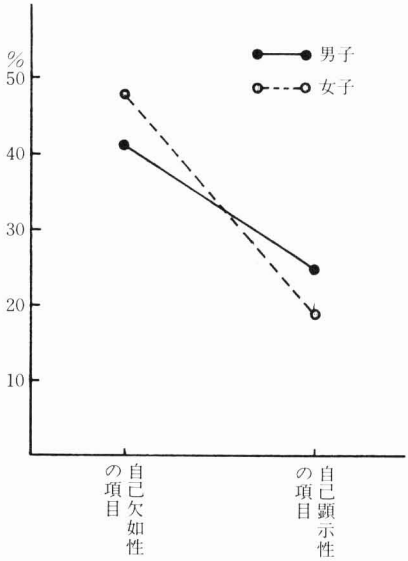

図3　ヒステリー項目の性別比較

（4）不安に関する項目について

項目22から項目31までが不安に関する項目である。男女間の回答傾向に有意な関連性が見られるのは、以下の項目である。項目23の「ちょっとしたことがすべて気になって、気づかれする」（男、32.8％：女、39.4％）、項目25の「ひとりで外出するのが不安である」（男、6.8％：女、16.4％）、項目26の「新聞やラジオでこわいニュースを見聞するとひどくおびえる」（男、2.4％：女、6.3％）、項目27の「いつもそわそわして落着きません」（男、9.3％：女、4.7％）、項目29の「いつも緊張していらいらしている」

（男、4.8％：女、1.3％）等である。これらの中で、項目23、25、26は男子に比べ女子の方が回答率が高く、項目27、29においては男子が高くなっている。全体的に男女とも回答率が低いために、詳細な指摘は困難であるが、女子学生は男子学生に比べ状態不安を示す傾向があり、他方、男子学生は特性不安を示す傾向があると考えられる。

（5）心気・恐怖・強迫に関する項目について

ここでは、項目32から項目42までが対象項目である。男女間の回答傾向に有意な関連性が見られる項目は、項目36の「特定の病気にたいする恐怖心がある」（男、18.6％：女、12.0％）、項目38の「特定の物（とがったもの、動物や虫など）にたいする恐怖心がある」（男、20.1％：女、28.7％）、項目39の「特定の状況（人の前で赤くなるなど）にたいする恐怖心がある」（男、19.3％：女、13.1％）等である。ところで、項目32「自分の身体や病気のことに非常に関心をもっている」、項目33「自分の健康のことが心配で仕方がない」、加えて項目36は、自分の体や健康、病気等についての質問項目である。この3項目の合併回答率を男女別にもとめ示したのが図4である。他方、項目37「特定の場所（高い所、暗い所など）にたいする恐怖心がある」や項目38等は、外界の特定場所や特定物への恐怖心の有無を質問する項目である。この2項目の合併回答率も男女別にもとめ図4に示した。

図4の結果から、自己への関心・恐怖項目においては、男子の方が有意に回答率が高く、反面、外界への関心・恐怖項目においては女子の回答率が高い。このようにして、男子学生は女子学生に比べ、関心や恐怖、強迫の対象を自己に向けやすく、一方、女子学生はこれらの対象が外界の物理的事物と結びつきやすいと考えられる。

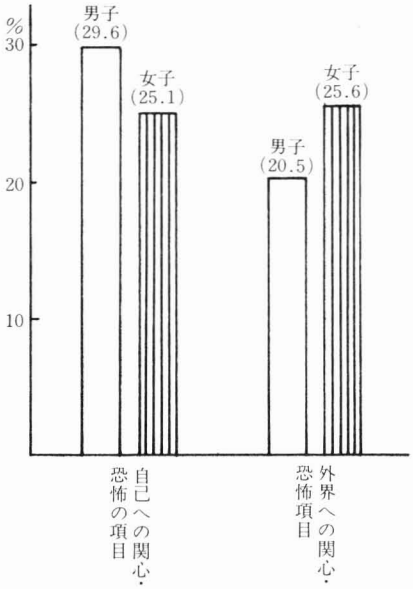

図 4　心気・恐怖・強迫項目の性別比較

（6）うつに関する項目について

うつに関する項目は、項目43から51までの９項目である。男女間の回答傾向に有意な関連性が見られる項目は、項目43の「自分の気持が人にわかってもらえず淋しい」（男、17.0％：女、23.2％）と項目47の「決断力がにぶっていて、あれやこれやと迷う」（男、49.1％：女、60.1％）である。両項目とも女子の回答率が高い。男女間の回答率にはほとんど差は見られないが、男女ともにある程度の回答率を示しているのは、項目48の「人中に出るのが嫌い」（男、29.5％：女、30.0％）である。また、項目51の「いっそ死んでしまいたいとよく思う」（男、2.6％：女、4.4％）の回答率は低いが、項目内容が深刻なものであるため、極めて危惧される結果である。

（7）分裂に関する項目について

ここで対象になるのは、項目52から58までの７項目である。男女間の回答率で有意な関連性が見られる項目は、項目57の「見知らぬ人に会ったり、

知らぬ場所に行くと心配になる」（男、34.3％：女、42.8％）の１項目である。他の項目を見ると、項目54「心を一つのことに集中できない」（男、18.0％：女、15.9％）、項目56の「緊張したときに、ひどく汗をかいたり、ふるえたりする」（男、34.0％：女、30.5％）の２項目において、男子学生の回答率が高くなっている。反面、項目55の「劣等感が強い」（男、25.7％：女、29.0％）、項目58の「目上の人が見ていると、仕事がさっぱりできない」（男、15.8％：女、19.6％）の２項目においては、女子学生の回答率が高い。このような結果から推測されることは、男子に比べ女子の場合、対人関係の面で何らかのネガテイブな行動特徴が表出されやすいと考えられる。

（８）身体・心身症に関する項目について

この領域は、項目59から91までの33項目である。男女間の回答傾向に有意な関連性が認められる主な項目は、次のようなものである。まず、男子の回答率が高い項目として、項目66の「体がやせる」（男、11.0％：女、6.3％）、項目89の「昼間小便の回数が多い」（男、12.8％：女、5.7％）等が挙げられる。また、女子の回答率が高くなっている項目は、項目74の「顔や手足がよくむくむ」（男、1.5％：女、4.7％）、項目75の「手足がよく冷る」（男、25.0％：女、44.9％）、項目76の「目が疲れやすい」（男、49.7％：女、58.5％）、項目82の「よく腹鳴りがする」（男、12.5％：女、19.8％）、項目83の「よく下痢したり、便秘したりする」（男、19.7％：女、29.5％）、項目85の「首、肩、背中がよくこる」（男、32.5％：女、47.0％）、項目87の「皮膚が敏感でまけやすい」（男、22.0％：女、31.9％）等である。

（９）脳器質障害に関する項目について

ここで対象となるのは、項目92から項目100までの９項目である。男女間の回答傾向に有意な関連性が認められるのは、項目93の「頭痛や頭重感がある」（男、10.9％：女、16.7％）の１項目である。他の項目を見ると、項目94の「目まいや、立くらみをよくする」（男、23.8％：女、30.0％）や項目100の「寝つきがわるい、眠りが浅い、短かい、多夢、悪夢」（男、17.4％：女、21.7％）等において、女子の回答率が高くなっている。その

他の項目においても、全体的に女子の回答率の方が高い値を示している。

2）学部別比較

本節では琉大生の健康、適応調査の結果を各カテゴリーに分類し、学部間にどのような差異､特徴が見られるかについて検討していくことにする。学部別に県内出身者、県外出身者の比率が異なり、また男女の比率、その他の要因及び意識的側面が異なるところから、学部別の特徴が見られるものと予想される。なお結果の比較検討は、学部別比較においてχ^2値が5%以下の項目を取り上げることにした*。

(1) 大学適応項目の結果について

まず最初に進路意識を中心とした大学適応項目の結果について学部別比較をしていく。

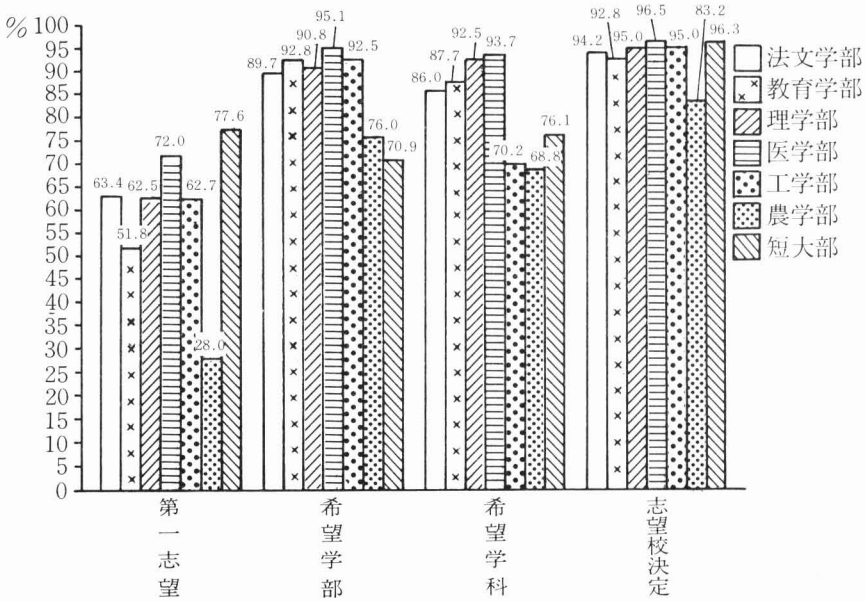

図5．進路志望項目への反応率の学部差

*各項目の学部別選択率は本節の末尾の表を参照

図5は入学時の進路意識について学部別に比較したものである。琉大が「第一志望校」であるかどうかについて学部別比較をしたところ、短大部（77.1%）、医学部（72.0%）、法文学部（68.4%）は第一志望の高いことがわかる。これらの結果は短大部、法文学部において県内出身者が多いことを示し、医学部では入試の偏差値が高いことを反映していると思われる。逆に最も第一志望率の低いのは農学部（28.0%）、教育学部（51.8%）であり、県外出身者が多く、第一志望の大学に合格できる見込みがなく仕方なく琉大を志望した第二志望者が多いことを示しているものと思われる。第一志望率は全体的に低い数値を示しているが、しかし、希望学部、希望学科の選択に関しては予想に反し高い数値を示している(70.9%～95.1%、68.8%～93.7%)。例えば、第一志望率の最も低かった農学部は希望学部で76.0%、希望学科では68.8%とかなりの肯定率を示している。同じく教育学部も、希望学部で92.8%、希望学科で87.7%とかなりの肯定率になっていることがわかる。しかし、農学部は他の学部に比較して希望学部、希望学科の肯定率が低いことを示している。また志望校の決定に関しては「自分で決めた」とする回答率がきわめて高いことを示している（83.2%～96.3%)。例えば第一志望率の低かった農学部は83.2%、教育学部は96.3%とかなりの肯定率となっている。この矛盾した結果はどのように解釈したらよいであろうか。共通一次試験の結果、第一志望をあきらめしぶしぶ承諾した琉大志望なのか、学部、学科の選択のみを指した結果なのであろうか。いずれにしても、県外出身者の琉大自体への否定的イメージは強いことがわかる。

それでは、県外出身者が初めて沖縄にやってきて、また初めて琉大に入学してどのように感じているのであろうか。図6は「沖縄という風土に不安」、「授業についての不安」への肯定率を学部別に比較して示している。図6から、沖縄での生活についての不安は全体的に低い（4.5%～35.2%）が、しかし授業についての不安は全体的に高いことを示している（45.3%～69.7%)。その中でも、第一志望率の低かった農学部と教育学部が両不安を高く訴たえている（35.2%と62.4%、25.1%と69.7%)。全体的に沖

縄生活への不安が低いことは親に経済的依存をしていること、また授業不安が高いのは自己の能力への不信を示しているものと思われる。そして医学部（63.6%）が授業不安の高いのは教育的環境、システムが高校までとは大幅に異なることを反映しているのであろう。以上のように大学への不安が高いが、サークルへの入部に関しては全体的に積極的である（47.0%～87.7%）。しかしサークルへの入部において農学部（71.2%）と教育学部（87.7%）は対照的な結果を示しており、教育学部において大学生活への積極性が認められる。

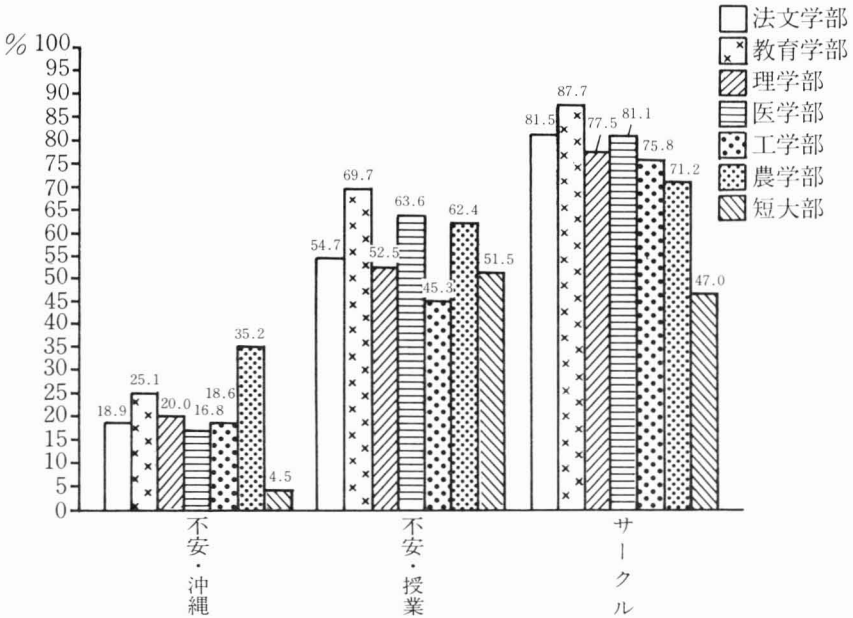

図6．不安（沖縄・授業）・サークル項目への反応率の学部差

次に学部別に差のある大学適応項目は図7に示してある「この調査の結果を知りたい」という項目と「卒業後の職業を考えている」の2項目である。前者で高い選択率を示しているのは短大部(67.2%)、法文学部(64.6%)

であり、両学部は県内出身者の多いことから県内出身者に自己の心身の健康に関心の高いことがわかる。次いで第一志望率が低くおよび状況不安の高かった教育学部（61.5%）、農学部（60.8%）の順となり、両学部は不安傾向の高い割に心身への関心の低いことがわかる。次に卒業後の職業意識では当然のことながら教育学部（91.3%）、医学部（87.4%）は高率の選択を示している。しかし就職率の高いと思われる工学部（66.5%）の値が低いのは以外であるが、希望通りの職業に就けるかどうかの不安を反映していると見なすこともできる。

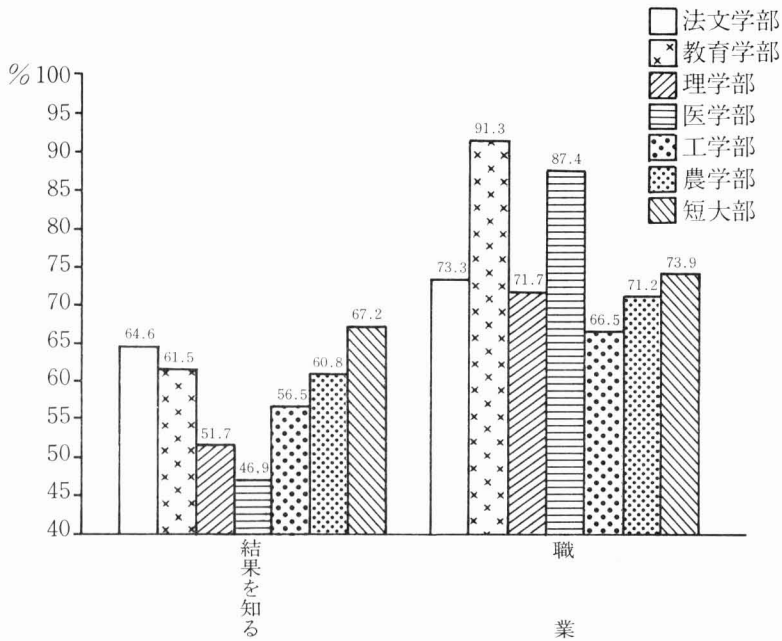

図 7. 調査結果と卒業後の職業意識項目への反能率の学部差

(2) 病歴項目の結果について

大学適応項目の結果は、農学部、教育学部においていささか不安傾向の高いことを示していたがそのような結果は病歴に関する項目の結果で裏づ

けることができるだろうか。病歴に関する６項目のうちχ^2値の高いのはＱ２、Ｑ３、Ｑ６であったのでここでもこの３項目の学部差について検討する。

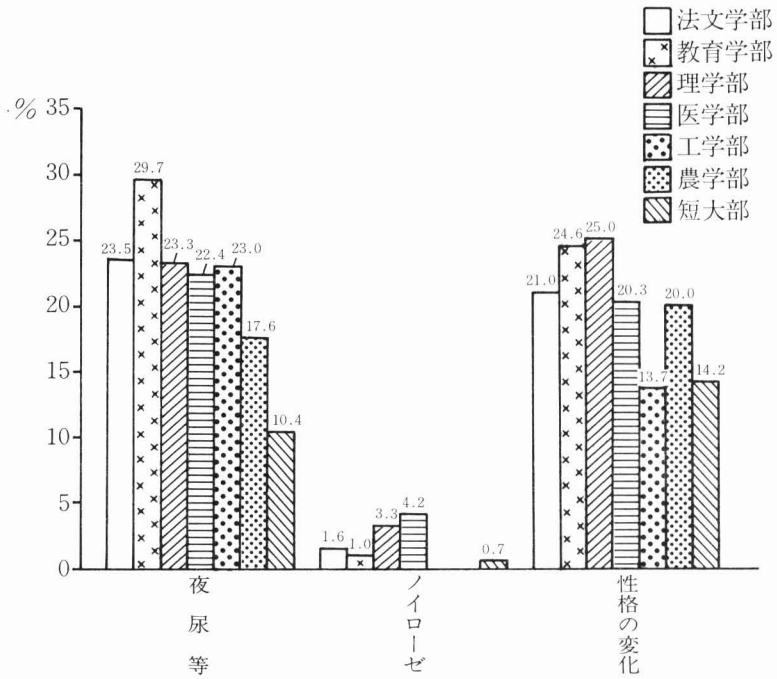

図８．病歴項目への反応率の学部差

図８は「子供の時の不安に基づく問題行動」と「ノイローゼ」、「最近の性格の変化」の有無を学部別に示している。図から子供の時最も不安傾向の高かったのは教育学部（29.7％）であり、農学部（17.6％）はそれほど高い値を示していないことがわかる。また短大部（10.4％）は子供の時の不安傾向が最も低く、その他の学部は23％前後にある。またノイローゼにかかったことは全体的に肯定率（0.0％～4.2％）が低く、学部差を問題にすることはできない。現在の不安傾向から農学部において子供の時の不安傾向も強いものと予想したが以外な結果である。農学部の現在の不安傾向

は進学競争を中心にして形成されたことを示しているのであろうか。また最近の性格変化の自覚の有無では、理学部（25.0%）、教育学部（24.6%）の肯定率が高く、農学部（20.0%）は比較的に肯定率が低い結果にある。以上の結果からすると同じ不安傾向とは言っても、教育学部と農学部は事情が多少異なることがわかり、教育学部の不安傾向が発達的に長びき、かつ、大学生活への積極的、不安の自覚を示しているところから、不安への対拠方法をいくらか身につけていることがうかがえる。

(3) ヒステリー項目の結果について

一般的にヒステリー性格とは、自己顕示性虚栄心、自己中心性、幼児性の強い傾向を指しているが、本調査のヒステリー項目で学部間に差を示したのは、Q10：何事によらず相談相手がほしい。Q20：すべて大げさに考えたり反応する。Q21：自分を実際以上に立派にみせる。の3項目であった（図9参照）。

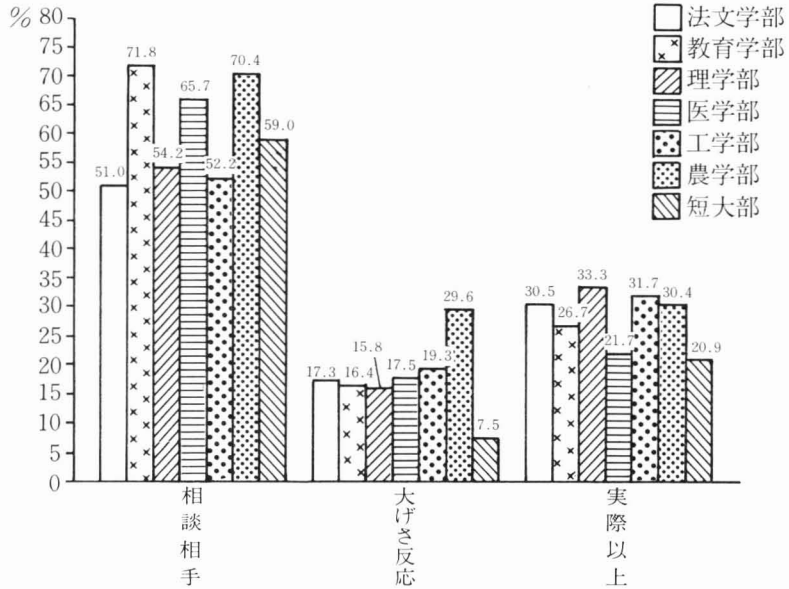

図9．ヒステリー項目への反応率の学部差

図９の結果から各項目に対する学部別の肯定率を検討していくと、自己中心性、未熟性を示すと思われる相談相手の結果は全体的に高いことがわかる（51.0％～71.8％）。ここでも先の結果と同様、教育学部（71.8％）と農学部（70.4％）はQ10への肯定率が高く不安傾向の高いことを示している。大げさ反応ではQ10ほど高い肯定率を示していない（7.5％～29.6％）が、しかし、農学部は（29.6％）は他学部に比較して高い肯定率を示している。また、「自分を実際以上に立派に見せる」という項目への反応は、理学部（33.3％）、工学部（31.7％）、法文学部（30.5％）、農学部（30.4％）と横一線の値を示しており、特に不安傾向の高い農学部において高いわけではない。このようなことからQ21への反応は不安だけでなく自己意識の要因も反映されることがうかがえる。

(4) 不安、心気症項目の結果について

これまでの結果から農学部と教育学部において相対的に不安傾向が高いと仮定して筆を進めてきたが、実際の不安、心気症の項目においてどのような傾向を示すであろうか。

図10は不安項目への反応率に学部差のあった４項目の結果を示している。図10から「心配ごと」（17.9％～40.0％）、「気づかれ」（23.1％～46.2％）の２項目の肯定率が高く、「落ちつかない」（1.5％～12.0％）、「物音に敏感」（7.5％～17.6％）の２項目の肯定率が低いことがわかる。学部別では「心配ごと」の結果において、農学部（40.0％）、教育学部（36.9％）と高い肯定率を示し、また「気づかれ」においても教育学部（46.2％）、農学部（44.0％）と高い肯定率を示し典型的な不安反応が両学部において高いことがわかる。また同様に「落ちつかない」の結果においても両学部（12.0％、11.3％）は他学部よりその肯定率が高いことを示している。以上に示したように、大学適応項目の結果に現われた農学部と教育学部の不安傾向は、実際の不安項目の結果で裏づけることができた。また、これまでの結果の学部別比較から、県外出身者の少ない短大部において不安傾向の低いことがうかがえる。

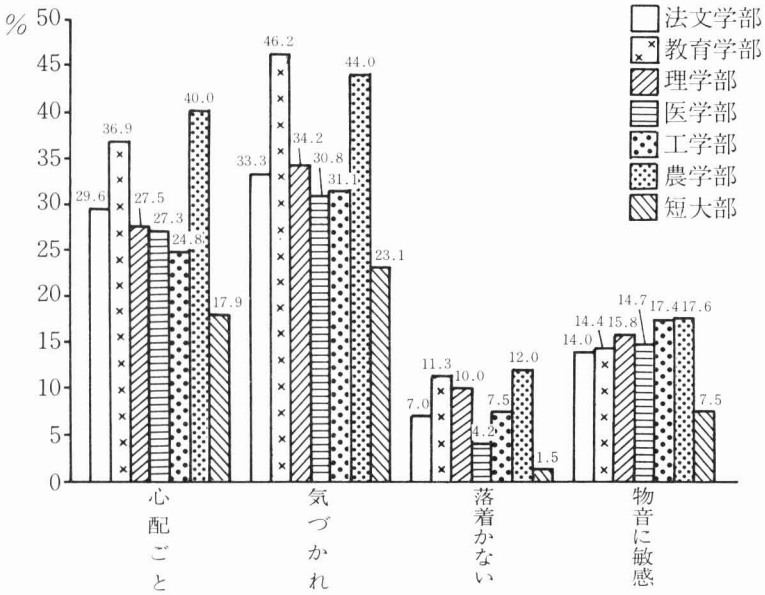

図10．不安・心気症項目への反応率の学部差

(5) 恐怖、強迫、うつ項目の結果について

恐怖、強迫両傾向とも不安の自己統制の欠如に関係しているが、不安傾向の高い農学部と教育学部において恐怖症の傾向、強迫神経症の傾向が高いものと予想される。図11は「物への恐怖」(13.0%～31.8%) と「不快な考えの出現」(11.9%～26.4%) を学部別にその肯定率を示している。当初に予想したように、「物への恐怖」は教育学部 (31.8%) において高いが、元々不安傾向の低い法文学部 (23.9%)、短大部 (20.9%) の肯定率も高いことから女子学生の反応が現われた結果であることが考えられる。因みに女子学生の最も少ない工学部 (13.0%) においてその肯定率が低い。しかし、「不快な考えの出現」では、農学部 (26.4%) が他学部より高く、教育学部 (15.4%) は平均的な肯定率を示している。これらの結果から考えると教育学部より農学部の方が不安傾向は高いことが予想される。

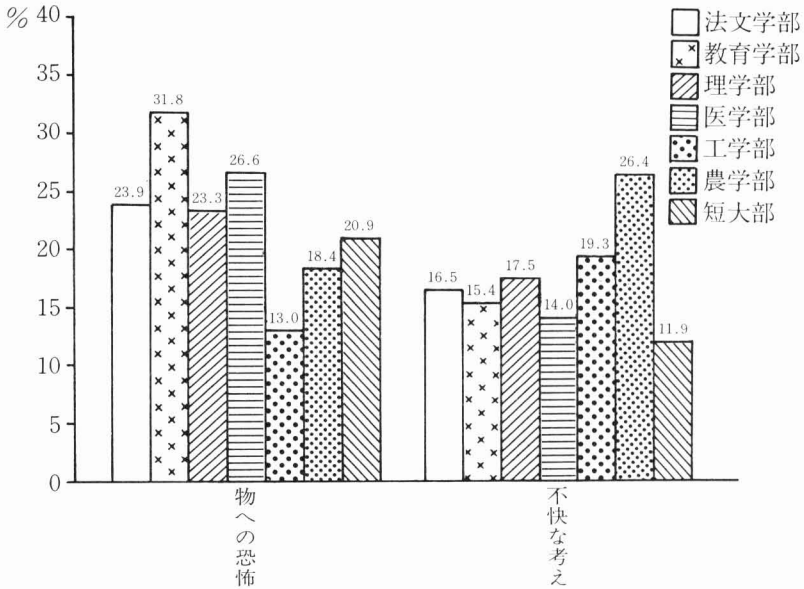

図11．恐怖・強迫項目への反応率の学部差

次に抑うつ項目の結果について検討していく。図12は抑うつ項目の肯定率を学部別に比較してある。図12から「淋しい」という項目に対しては教育学部（26.2%）、医学部（25.9%）の肯定率が高いがそれほど高い値ではない。しかし農学部（16.0%）は不安傾向の高い割にはその肯定率が低く、自覚の低いことを裏づける結果となっている。「決断力がにぶり迷う」という項目に対しては、教育学部（61.5%）、工学部（58.4%）、農学部（52.2%）の肯定率が高く教育学部、農学部の結果は不安傾向の高いことから肯づける結果であるが、工学部の結果はこれまでの結果と相入れないものになっている。そして「人中が嫌い」に対しては、理学部（38.4%）が最も肯定率が高いが、これは理数系の人たちの思索好きを反映しているのであろうか。また、ここでも農学部（35.2%）は不安傾向の高さを反映してその肯定率の高いことがわかる。

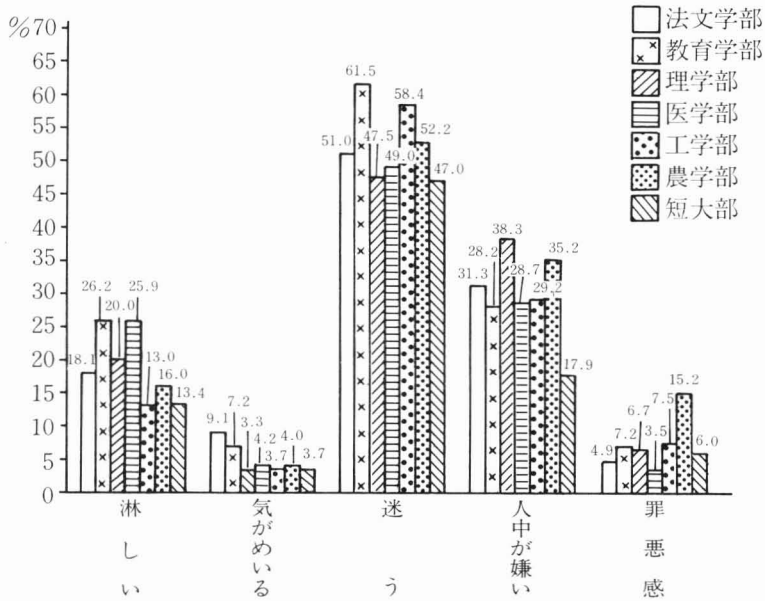

図12．抑うつ項目への反応率の学部差

(6) 分裂症項目の結果について

ここでうつ症項目と同様に不安神経症よりも症的な傾向を示す分裂症項目への反応率の学部差について検討していくことにする。図13は学部間でその肯定率に差を示した項目について示してある。「心をひとつに集中できない」(11.2%～24.8%) は全体的に高い肯定率ではないが不安傾向の高い農学部 (24.8%) は他学部より高い肯定率を示し、不安の高さが知的活動を妨害していることがうかがえる。また教育学部 (14.4%) の肯定率が低いのは不安傾向の割には活動的、積極的だからであろう。しかしながら「強い劣等感」(20.5%～33.6%) では教育学部 (32.8%) の肯定率、農学部 (33.6%) の肯定率が高くなり、県外出身者が受験競争の中で敗北感をいだいてきていることがうかがえる。「緊張したときに、ひどく汗をかいたり、ふるえたりしますか」(18.7%～37.5%) という項目に対しては短大部 (18.7%) と医学部 (28.7%) の肯定率は低いが、しかし農学部

（32.5％）、教育学部（36.4％）の肯定率が特別に高いわけでない。この3項目は分裂症項目としてカテゴライズされていたが、不安傾向の延長に位置する特徴を示しているものと思われる。

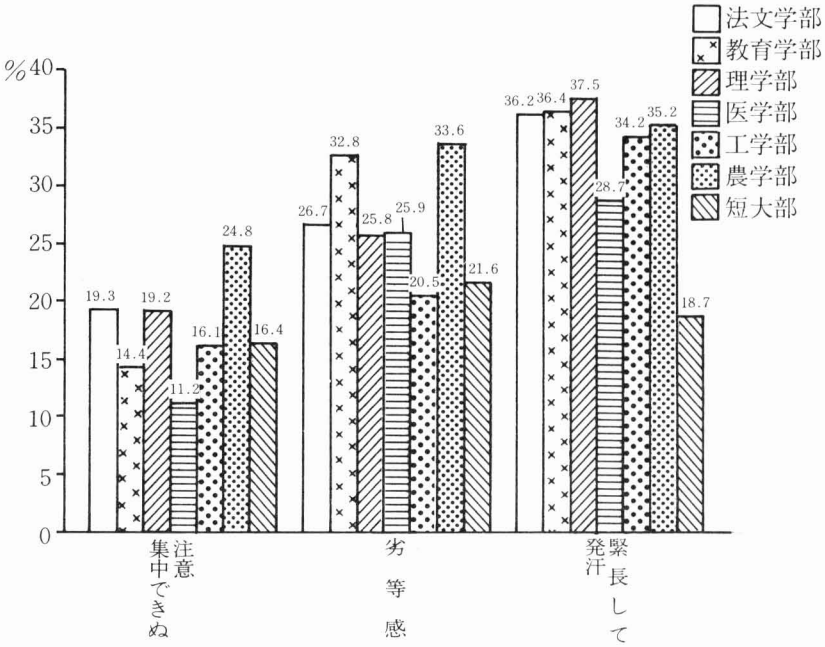

図13. 分裂病項目への反応率の学部差

(7) その他の結果について

最後に最も多く項目を含んでいる心身症項目への反応率に学部差が顕著に見られないことを報告し*、脳器質障害項目の結果の学部差について検討していくことにする。図10は脳器質障害項目への反応率の学部差を示してある。図10から「頭がぼんやりする」（13.0％～24.2％）という項目に対して、理学部（24.2％）、教育学部（22.6％）、法文学部（20.6％）の肯

*皮膚の敏感項目のみ、教育学部、法文学部の肯定率が高い。

定率が高いことがわかる。しかし不安傾向の高い農学部（16.8%）は低い肯定率を示している。この結果は本来の不安に基づく知的疲労と見なすよりは、入学時の不安を反映した知的疲労であるものと思われる。「睡眠障害」の項目に対しては教育学部（26.2%）の肯定率が最も高く、次いで工学部（21.1%）の順になっているが、受験勉強による疲労と入学時の不安感が作用した結果であろうか。

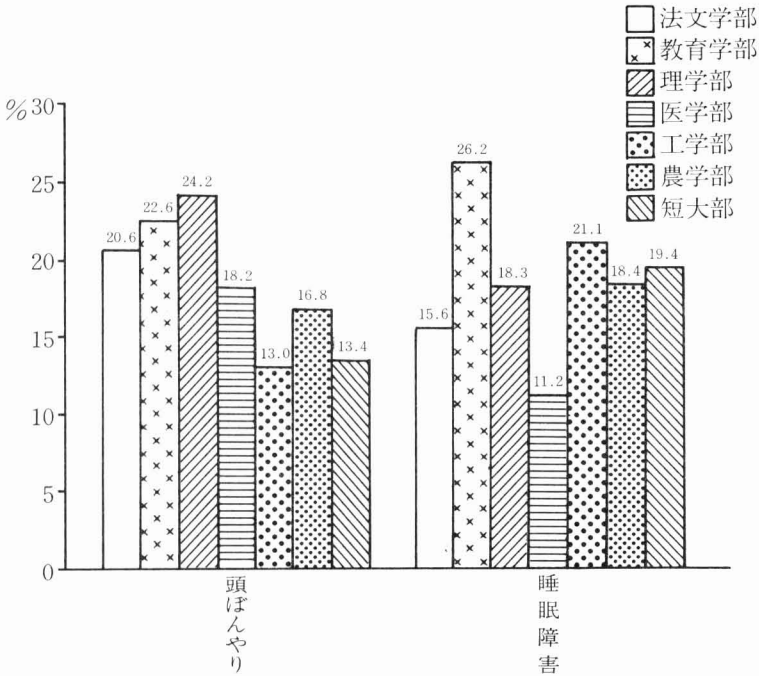

図14．脳器質障害項目への反応率の学部差

以上に比較検討してきたように健康、適応調査の学部別比較の結果、農学部、教育学部において不安傾向が高く、神経症的傾向の強いことがうかがえた。しかし、同じ神経症的傾向とは言っても、教師という目標のはっきりしており、また女子学生の多い教育学部は全体的により積極的、活動的である傾向がうかがえた。

表２，健康・適応調査票への反応率の学部差（％）　＊Ｐ＜0.05

Q番号	法文学部	教育学部	理学部	医学部	工学部	農学部	短大部	計
1	38.7	36.9	35.0	36.4	41.6	40.0	39.6	38.4
2	23.5	29.7	23.3	22.4	23.0	17.6	10.4	22.1
3	1.6	1.0	3.3	4.2	0.0	0.0	0.7	1.5
4	0.8	0.5	0.0	0.7	0.6	0.0	0.0	0.4
5	3.3	7.2	4.2	5.6	5.0	5.6	5.2	5.1
6＊	21.0	24.6	25.0	20.3	13.7	20.0	14.2	20.0
7	9.5	7.2	6.7	7.7	6.8	8.8	4.5	7.5
8	28.0	16.9	23.3	10.5	21.7	24.0	9.0	19.7
9	31.7	33.8	44.2	30.8	40.4	40.8	33.6	35.8
10＊	51.0	71.8	54.2	65.7	52.2	70.4	59.0	60.1
11	49.8	46.2	40.8	50.3	44.1	44.8	35.8	45.2
12	44.9	45.6	42.5	39.2	42.2	44.8	35.1	42.5
13	23.5	21.0	25.8	22.4	22.4	29.6	13.4	22.5
14	20.6	27.2	28.3	25.9	20.5	26.4	23.9	24.3
15	30.0	28.7	31.7	23.1	27.3	24.0	20.1	26.9
16	28.8	31.3	25.0	28.7	24.2	27.2	20.9	27.0
17	51.4	50.8	52.5	51.0	46.6	41.6	45.5	48.9
18	12.8	8.7	5.8	9.8	9.9	9.6	9.7	9.8
19	57.6	63.6	61.7	55.2	61.5	60.8	47.0	58.4
20＊	17.3	16.4	15.8	17.5	19.3	29.6	7.5	17.5
21＊	30.5	26.7	33.3	21.7	31.7	30.4	20.9	28.0
22＊	29.6	36.9	27.5	27.3	24.8	40.0	17.9	29.4
23＊	33.3	46.2	34.2	30.8	31.1	44.0	23.1	35.0

Q番号	法文学部	教育学部	理学部	医学部	工学部	農学部	短大部	計
24	25.1	20.0	16.7	19.6	14.9	22.4	19.4	20.2
25	9.1	14.4	7.5	11.2	8.1	9.6	9.7	10.1
26	3.3	5.1	4.2	5.6	3.1	1.6	3.0	3.7
27＊	7.1	11.3	10.0	4.2	7.5	12.0	1.5	7.5
28＊	14.0	14.4	15.8	14.7	17.4	17.6	7.5	14.5
29	4.1	2.1	5.8	3.5	2.5	4.8	3.0	3.6
30	27.6	23.6	19.2	17.5	24.8	23.2	17.9	22.7
31	25.5	20.5	24.2	21.7	26.1	18.4	16.4	22.2
32	46.9	53.8	53.3	62.2	54.0	48.8	52.2	52.6
33	15.6	16.4	14.2	14.0	10.6	16.8	16.4	14.9
34	5.3	9.2	8.3	4.2	6.2	3.2	6.0	6.2
35	18.5	22.1	25.8	19.6	16.8	13.6	16.4	19.0
36	14.8	17.9	15.8	15.4	17.4	17.6	15.7	16.3
37	17.7	23.1	21.7	20.3	21.7	23.2	23.9	21.3
38＊	23.9	31.8	23.3	26.6	13.0	18.4	20.9	23.0
39	15.2	17.4	14.2	18.9	17.4	22.4	15.7	17.1
40	25.1	22.6	27.5	25.9	17.4	23.2	20.9	23.2
41	37.9	39.0	41.7	30.8	34.2	36.8	27.6	35.7
42＊	16.5	15.4	17.5	14.0	19.3	26.4	11.9	17.0
43＊	18.1	26.2	20.2	25.9	13.0	16.0	13.4	19.2
44＊	9.1	7.2	3.3	4.2	3.7	4.0	3.7	5.5
45	2.9	0.5	1.7	1.4	1.9	1.6	0.0	1.5
46	10.7	8.2	4.2	4.9	6.8	7.2	5.2	7.2
47＊	51.0	61.5	47.5	49.0	58.4	52.8	47.0	53.0

Q番号	法文学部	教育学部	理学部	医学部	工学部	農学部	短大部	計
48＊	31.3	28.2	38.3	28.7	29.2	35.2	17.9	29.7
49＊	4.9	7.2	6.7	3.5	7.5	15.2	6.0	7.0
50	6.6	2.6	3.3	3.5	6.8	6.4	3.7	4.8
51	4.9	3.6	3.3	4.2	2.5	0.8	1.5	3.2
52	10.3	7.7	7.5	4.9	6.8	10.4	7.5	8.0
53	14.0	12.3	12.5	10.5	12.4	11.2	4.5	11.4
54＊	19.3	14.4	19.2	11.2	16.1	24.8	16.4	17.2
55＊	26.7	32.8	25.8	25.9	20.5	33.6	21.6	26.9
56＊	36.2	36.4	37.5	28.7	34.2	35.2	18.7	32.9
57	37.9	36.4	34.2	39.9	32.9	43.2	35.8	37.1
58	19.3	19.5	20.8	11.2	18.0	16.0	12.7	17.1
59	9.9	9.7	9.2	4.2	9.3	11.2	3.7	8.4
60	6.2	7.2	5.0	3.5	6.8	4.8	5.2	5.7
61	23.9	26.7	27.5	19.6	24.8	24.0	20.1	23.9
62	5.8	10.8	5.0	6.3	4.3	6.4	5.2	6.4
63	15.6	15.4	15.8	12.6	18.6	16.0	8.2	14.8
64	6.6	8.7	13.3	3.5	6.2	8.0	4.5	7.1
65	6.2	3.6	7.5	3.5	6.2	8.8	3.0	5.4
66	13.2	6.2	8.3	8.4	10.6	8.8	8.2	9.4
67	4.1	9.1	4.2	6.3	9.9	4.0	2.2	5.9
68	7.8	10.3	13.3	7.7	8.1	8.8	6.0	8.7
69	2.5	1.5	4.2	2.1	0.0	1.6	1.6	1.9
70	2.5	3.6	2.5	4.9	4.3	4.8	2.2	3.5
71	3.3	2.1	5.8	3.5	4.3	1.6	3.7	3.4

Q番号	法文学部	教育学部	理学部	医学部	工学部	農学部	短大部	計
72	8.2	8.7	7.5	7.0	9.9	5.6	3.0	7.4
73	11.9	15.4	14.2	10.5	14.3	9.6	8.2	12.2
74	2.9	4.1	1.7	3.5	1.2	2.4	1.5	2.6
75	32.5	36.4	32.5	25.2	29.2	28.0	38.8	32.0
76	56.4	50.8	56.7	53.8	49.7	47.2	52.2	52.6
77	9.9	7.2	15.8	7.0	12.4	11.2	4.5	9.5
78	7.4	7.7	10.8	9.8	9.3	8.8	6.0	8.4
79	5.8	8.2	9.2	3.5	5.6	14.4	6.0	7.2
80	7.0	11.3	10.8	8.4	8.1	10.4	8.2	9.0
81	4.1	6.2	1.7	2.1	4.3	4.8	3.7	4.0
82	18.1	15.9	11.7	16.1	18.1	5.6	15.7	15.1
83	22.2	26.7	25.8	26.6	21.1	20.0	18.7	23.1
84	16.5	17.4	15.0	16.8	13.7	12.8	11.2	15.1
85	37.9	43.6	38.3	36.4	34.2	33.6	35.8	37.5
86	13.6	13.8	15.8	12.6	10.6	12.8	9.0	12.7
87＊	30.5	36.4	27.5	19.6	21.1	20.8	16.4	25.7
88	0.4	2.1	1.7	2.1	0.6	0.8	0.7	1.2
89	11.9	6.7	10.8	7.0	11.8	16.0	9.0	10.3
90＊	13.2	17.4	7.5	16.1	3.1	1.6	13.4	11.0
91	11.5	15.9	6.7	5.6	1.2	2.4	11.2	8.5
92＊	20.6	22.6	24.2	18.2	13.0	16.8	13.4	18.6
93	16.9	12.3	16.7	14.7	8.1	6.4	12.7	12.8
94	28.8	29.2	29.2	18.9	23.0	32.8	17.9	26.0
95	5.8	3.1	5.8	2.8	2.5	4.0	3.0	3.9

Q番号	法文学部	教育学部	理学部	医学部	工学部	農学部	短大部	計
96	3.3	5.1	5.8	4.9	4.3	4.8	2.2	4.3
97	0.0	1.0	0.8	1.4	0.6	0.0	0.0	0.5
98	2.9	3.1	1.7	2.1	3.1	0.0	3.0	2.4
99	2.9	1.5	4.2	2.1	2.5	1.6	2.2	2.4
100＊	15.6	26.2	18.3	11.2	21.1	18.4	19.4	18.7
101＊	63.4	51.8	62.5	72.0	62.7	28.0	77.6	60.0
102＊	89.7	92.5	90.8	95.1	92.5	76.0	70.9	87.7
103＊	86.0	87.7	92.5	93.7	70.2	68.8	76.1	82.6
104	88.1	92.8	90.8	92.3	88.2	83.2	88.8	89.3
105 ＊	94.2	92.8	95.0	96.5	95.0	83.2	96.3	93.5
106	45.7	50.3	42.5	37.1	41.6	48.0	38.1	43.8
107＊	18.9	25.1	20.0	16.8	18.6	35.2	4.5	19.9
108＊	54.7	69.7	52.5	63.6	45.3	62.4	51.5	57.4
109	95.9	94.9	97.5	99.3	97.5	96.0	97.0	96.7
110＊	81.5	87.7	77.5	81.1	75.8	71.2	47.0	76.0
111	77.8	87.3	83.3	88.1	80.7	80.8	88.1	83.4
112	37.0	38.5	34.2	37.1	33.5	32.0	24.6	34.4
113＊	64.6	61.5	51.7	46.9	56.5	60.8	67.2	59.1
114	86.4	88.2	85.8	85.3	82.0	76.0	83.6	84.4
115＊	73.3	91.3	71.7	87.4	66.5	71.2	73.9	76.9
116	65.0	67.7	61.7	67.8	61.5	65.6	61.9	64.7

（反応率とは各項目への肯定的反応を指す）

3）出身地域による比較

出身地域により、学生の進学動機や大学選択の基準が異なることが推定され、出身地域による分析を試みることにした。まず出身地域により第1志望率がどのように違うのかみると、沖縄82％、九州以外の本土53％、九州19％であり、九州出身者の第1志望率が顕著に低率であることがわかった。また各学部における県内出身者の割合をみるために、地元率（表3）を算出した。地元率の高い学部は、短大部（97.2％）法文学部（72.0％）で、逆に低い学部は農学部（29.2％）教育学部（48.8％）であった。特に農学部の地元率の低さが目立った。県外出身者に第2志望の学生が多いことから推測されるように農学部の地元率の低さは、その大半が県外出身の第2志望者によって占められていることを示していると考えられる。

つぎに、以上のような地域的な特色を有する対象学生について、さらに分析するために、第1志望率の著しく異なる沖縄出身者と九州出身者の各質問項目についての回答の仕方を比較した。表4が各質問項目に対する回答率の検定結果である。九州出身者が沖縄出身者よりも「はい」と答える回答率が高かったのは、Q8、Q10、Q13、Q15、Q16、Q19、Q22、Q24、Q25、Q26、Q27、Q28、Q33、Q37、Q40、Q42、Q43、Q56、Q57、Q59、Q61、Q62、Q67、Q78、Q80、Q84、Q94、Q95、Q106、Q107、Q108の31項目であった。その中で比較的多くの者（30％以上の者）が「はい」と答えた項目は、Q10「何事によらず相談相手が欲しい」Q15「人や物の好き嫌いがはげしい」Q16「暗示にかかりやすい」Q19「よくいろいろなことを空恐して楽しむ」Q22「いつも何か心配ごとがある」Q56「緊張したときにひどく汗をかいたり、ふるえたりする」Q57「見知らぬ人に外ったり、知らぬ場所に行くと心配になる」Q94「目まいや、立ちくらみをよくする」Q106「学生生活に不安を感じる」Q108「授業について不安がある」の11項目であった。沖縄県出身者が九州出身者よりも「はい」と答える回答率の高かったのは、Q75、Q101、Q105、Q113、Q114の5項目であった。精神、身体項目ではQ75「手足が良く冷る」という項目のみで、沖縄県出身者が九州出身者を上まわった。

以上の結果から、九州出身者は沖縄出身者と比較して精神的・身体的な両面において不安定な状態に置かれていることが明かになった。そして大学という新しい環境や沖縄という風土に不安を感じていることがわかった。それにくらべ、沖縄出身者は地元の利からか、第１志望の者も多く、環境に対する不安も少なく、自分なりの目標を持ち、精神的にも身体的にも比較的安定した状態にあることがわかった。本調査は入学直後のオリエンテーションの時に実施されたため、九州出身者は急激な環境の変化に対応できず、このような回答傾向を示したものとも考えられる。このような不安定な傾向がどの程度まで持続するのか興味深い問題でもあり追跡調査を継続的に行う必要があろう。

表３．各学部の入学者数と地元率

出身＼性別＼学部		法文	教育	理	医	工	農	短大	計
県内	男	148	32	71	48	139	35	111	584
	女	74	78	15	47	6	6	99	325
	計	222	110	86	95	145	41	210	909
県外	男	71	65	53	48	63	93	2	395
	女	15	50	10	18	0	6	4	103
	計	86	115	63	66	63	99	6	498
	計	308	225	149	161	208	140	216	1407
地元率%	男	67.5	32.9	57.2	50.0	68.8	27.3	98.2	59.6
	女	83.1	60.9	60.0	72.3	100.0	50.0	96.1	75.9
	全体	72.0	48.8	57.7	59.0	69.7	29.2	97.2	64.6

表4．九州出身者と沖縄出身者の比較

項　目	χ^2	項　目	χ^2	項　目	χ^2	項　目	χ^2
1	6.18	31	2.63	61 ㊇	9.35	91	0.52
2	0.06	32	0.02	62 ㊇	8.28	92	1.66
3	2.11	33 ㊇	6.79	63	2.91	93	0.28
4	3.23	34	1.61	64	5.56	94 ㊇	20.22
5	0.02	35	5.03	65	3.82	95 ㊇	10.59
6	3.61	36	2.82	66	0.23	96	0.55
7	0.61	37 ㊇	6.70	67 ㊇	7.39	97	0.23
8 ㊇	7.64	38	6.11	68	0.97	98	2.77
9	0.29	39	4.11	69	0.02	99	0.01
10 ㊇	23.09	40 ㊇	10.44	70	4.25	100	1.94
11	3.75	41	0.97	71	0.10	101 ㊅	363.07
12	3.67	42 ㊇	14.60	72	4.66	102	0.12
13 ㊇	9.48	43 ㊇	12.76	73	0.05	103	0.05
14	0.26	44	0.01	74	1.35	104	2.84
15 ㊇	13.00	45	1.88	75 ㊅	19.92	105 ㊅	72.30
16 ㊇	7.30	46	4.19	76	1.66	106 ㊇	13.11
17	0.62	47	0.15	77	0.78	107 ㊇	267.33
18	3.12	48	5.25	78 ㊇	8.46	108 ㊇	9.93
19	11.28	49	0.01	79	3.04	109	4.23
20	4.86	50	4.30	80 ㊇	9.56	110 ㊇	16.22
21	3.86	51	1.48	81	1.61	111	0.88
22 ㊇	22.80	52	3.63	82	0.07	112	6.15
23	3.67	53	0.30	83	1.21	113 ㊅	10.46
24 ㊇	11.84	54	2.17	84 ㊇	11.48	114 ㊅	8.86
25 ㊇	25.39	55	3.57	85	0.06	115	0.12
26 ㊇	9.59	56 ㊇	20.09	86	3.44	116	0.08
27 ㊇	11.82	57 ㊇	7.28	87	2.82		
28 ㊇	19.76	58	5.06	88	1.31		
29	2.62	59 ㊇	8.22	89	1.71		
30	1.97	60	1.87	90	2.46		

注）㊇㊅ P＜.01で有意差のあった項目

4）第1志望と第2志望の比較

対象被験者をQ101「本学は第一志望の大学でしたか」に「はい」と答えたものを「第2志望群」とし、それに「いいえ」と答えたものを「第2志望群」とした。次に、各項目を第1志望群と第2志望群で比較し（x^2検定）、有意な差を見た項目を抽出し表5に示した。表の各項目番号に①または②の記号で示したのは、両群間に1％水準の有意差をみたものである。すなわち、①は「第1志望群」が「第2志望群」よりも高い項目であり、また②は逆に「第2志望群」が「第1志望群」よりも高い項目である。

第2志望群は116項目中19項目に有意義が見られた。一方、第1志望群は8項目に有意差を見た。

表6はこれらの項目の特性を明らかにする目的で、両群別々に、各項目の文章と各々の文章に対応する臨床診断名を示したものである。第2志望群はヒステリー3問、不安状態4問、心気症1問、強迫神経症1問、抑うつ状態3問、精神分裂症1問、心身症3問、脳（神経）障害1問や不適応1問、と神経症的状態にある者が多かった。一方、第1志望群は表7で示したように心身症2問、脳（神経）障害1問、大学適応4問、分類不能1問、と大学適応良好を示唆する反応が多かった。表8は以上の結果をまとめて示したものである。

「共通一次世代」という言葉が使われるようになって久しいが、本学で共通一次世代についての意識調査をしたのは昭和60年12月の「学生生活実態調査」と本研究だけであろう。「学生生活実態調査」によると、共通一次試験の結果によって大学または学部を変更した学生は、変更しなかったいわゆる琉大一直線タイプとは、その意識に若干の差がみられた。それらは主に講義への出席率の低下、専門書購読が少ないなど否定的な側面を示している。また、本研究と関連する領域すなわち疾病との関係では、琉大一直線グループよりも変更群は、その発症率が高く、また負傷率も高かった。学生生活実態調査は全学部、全学年を対象としたもので、本研究対象とはその調査範囲でも異なっているが、本研究をいくらか支持しているといえよう。すなわち、本研究の第2志望群が学生生活実態調査の共通一次

試験後に志望校等を変更した群に対応するものと思われる。

ところが、本研究の第１志望群と第２志望群とでは、調査結果にあまりにも差が歴然としているが、それには二つの要因が関係しているものと考えられる。その一つは、調査の実施時期の要因である。本調査は入学直後であり、特に第二志望群にとっては、合格を祝する心情よりも、その出身地から考慮して、むしろ琉大に来て落担しているところが反映しているものと考えられる。もう一つの要因は、全学的調査である学生生活実態調査の結果でも明らかなように、第２志望群は本質的にこの種の情緒的問題や学業に専念できない何かを有している可能性を秘めていることである。この点については、今後追跡調査によって解明する必要がある。

表5．第1志望者と第2志望者の比較

項　目	χ^2	項　目	χ^2	項　目	χ^2	項　目	χ^2
1	0.05	31	1.88	61②	12.58	91①	29.87
2	1.91	32	0.08	62②	131.68	92	0.45
3	5.78	33②	8.80	63	5.23	93	0.42
4	4.58	34	2.42	64	2.24	94②	9.51
5	0.24	35	2.03	65	1.07	95	5.64
6	5.62	36	2.36	66	0.86	96	0.01
7	0.78	37	0.10	67	5.30	97	0.26
8②	28.81	38	0.11	68	0.62	98	4.48
9	0.02	39	0.25	69	3.54	99	0.85
10	3.69	40	3.91	70②	8.20	100①	7.67
11	2.97	41	0.12	71	0.01	101	★
12	0.81	42②	23.42	72	3.59	102①	23.08
13	5.67	43	5.04	73	0.58	103①	19.93
14	0.74	44②	7.84	74	0.03	104①	44.67
15②	21.53	45	5.81	75①	12.11	105①	70.75
16	0.35	46	5.54	76	0.01	106	1.90
17	0.01	47	1.31	77	0.92	107②	125.98
18	1.94	48	5.08	78	1.30	108	0.12
19	2.98	49	5.93	79	0.23	109	2.69
20	0.89	50②	6.81	80	1.97	110	0.78
21②	9.18	51②	18.23	81	0.76	111	0.02
22②	28.34	52	4.95	82	0.01	112	3.78
23	5.27	53	0.08	83	0.01	113①	10.29
24②	8.21	54	3.49	84	5.26	114	5.99
25	3.08	55②	16.75	85	0.43	115	0.01
26	0.19	56	5.69	86	0.84	116	0.36
27	2.82	57	0.80	87	1.84		
28②	9.06	58	0.79	88	0.19		
29②	10.10	59②	7.98	89	0.95		
30	4.98	60	2.21	90	0.61		

注）①②P＜.01で有意差のあった項目

＊②は第二志望群　＊＊①は第一志望群

表6．第2志望群が有意な（χ^2検定）項目および臨床名

項目番号	項　目　内　容	臨症診断名
8	不平や不満が多い方です	ヒステリー
15	人や物に好き嫌いがはげしい	ヒステリー
21	自分を実際以上に立派にみせたがる	ヒステリー
22	いつも何かと心配ごとがある	不安神経症
24	はっきりした原因がないのに、いろいろのことが不安になる	不安神経症
28	物音にひどく敏感である	不安神経症
29	いつも緊長していらいらしている	不安神経症
33	自分の健康のことが心配で仕方がない	心気神経症
42	不快な考えがくりかえし頭にうかんできて、はらいのけることができない	強迫神経症
44	何をしても楽しくなく、気がめいる	抑うつ症
50	将来に全く希望がないように思える	抑うつ症
51	いっそ死んでしまいたいとよく思う	抑うつ症
55	劣等感が強い	精神分裂
59	よく病気する方です	心身症
61	体がだるくて疲れ易い	心身症
62	よく全身の力がぬけたようになる	心身症
70	脈が急に早くなったり、狂ったりする	心身症
94	目まいや、立くらみをよくする	脳(神経)障害
107	沖縄という風土に不安を感じる	不適応

表７．第１志望群が有意な（χ^2 検定）項目および臨床名

項目番号	項　目　内　容	臨床診断名
75	手足がよく冷える	心身症
91	月経は不順です	心身症
100	睡眠はどうですか（寝つきがわるい、眠りが浅い、短い、多夢、悪夢）	脳(神経)障害
102	希望した学部に入学した	大学適応
103	希望した学科（課程）に入学した	大学適応
104	大学には希望を持って進学した	大学適応
105	志望校の決定は自分でした	大学適応
106	この調査の結果を知りたい	その他

表８．両群の臨床診断名とその数

	臨床診断名	項目数
第２志望群	ヒステリー	3
	不　　安	4
	心　気　症	1
	強迫神経症	1
	抑　う　つ	3
	分　裂　症	1
	心　身　症	4
	脳(神経)障害	1
	大学不適応	1
第１志望群	心　身　症	2
	脳(神経)障害	1
	大学　適応	5

Ⅲ－3　変数間関係の構造分析

1）大学適応項目の分析

(1)　学部、出身地、性別について

Q101～Q116の大学適応項目についての数量化第Ⅲ類により処理した。第1軸の上方には「大学が第2志望」「大学には希望なし」「目標なし」「志望校は自分で決めなかった」「友人すぐにできそうにない」と回答された項目があった。逆に第1軸の下方には「大学は第1志望」「第1志望の学科」「大学に希望あり」「目標あり」「友人すぐにできるだろう」と回答された項目があった。これらの項目の分布から推定すると、第1軸は、大学生活への意欲度あるいは、大学選択の有効感に関連するものと思われる。暫定的に≪意欲高―意欲低≫の軸と命名する。第2軸は右側に「授業の不安なし」「生活の不安なし」「悩みなし」「相談必要なし」「沖縄の風土に不安なし」という回答項目があり、左側の対極に「授業の不安あり」「悩みあり」「調査の結果知りたい」「相談したい」という回答項目が分布した。したがって第2軸は学生生活に関連した不安や悩みの軸と解釈される。この軸も暫定的に命名すると、≪不安高―不安低≫の軸となろう。

学部、出身地、性別について、関連要因として数量化平均点を算出して、≪意欲高―意欲低≫、≪不安高―不安低≫の2軸の交差によってできた4平面上に布置したものが図15である。まず学部について見ると、法文学部を中心にして各学部がその周辺に分布する。意欲の軸で高の方に医学部、低の方に農学部が位置する。これは、医学部が職業、資格と直結した学部であり、将来の展望や自分自身の方向性をある程度自己決定して進学してきたためであろう。一方、農学部は地元率が29.2％と全学部中最も低いことから他県からの不本意入学者が多いと推定され、共通1次試験の成績から消極的な進路選択した者が含まれているためと解釈される。また不安の軸については、高の方に教育学部が、低の方に短大部が位置することがわかった。教育学部も医学部同様資格取得を希望して進学してくる者が多いが、ここ数年県内はもちろん、全国レベルでの就職率の低下傾向を反映して、不安傾向が他学部より高くなったのではないかと推測される。しかし

詳細は、今後の調査が必要であろう。短大部は圧倒的に地元率が97.2％と高率であり、県外出身者が感じるような環境に対する不安が低いものと考えられる。また職業につきながら進学した者や、社会に出てから入学してきた者も多く、生活面での安定度が他学部の学生と異るものと思われる。以上の4学部が最も特徴的であり、残りの学部はその中間に位置することがわかった。

つぎに男女の性差を比較してみると、意欲の軸にそって男より女の方がやや意欲高の傾向が見られた。不安の軸については、性差はあまり顕著でなかった。このような特徴は、青年期の女性の着実さや堅実さのような特性を反映しているのだろうか。

地域についてみると、九州各県は全て≪意欲低―不安高≫の第2象限に分布することがわかった。沖縄は第3象限に、東京、大阪、近畿は第4象限に分布していた。九州出身者の多くは、環境の変化にとまどいながら、しかも大学選択も主体的に行ったという実感も持てないままに、現実に対し意欲的に関われずにいる状態にあることが推定される。九州以外の本土出身者の中には、九州地区より第1志望率が高いことからうかがわれるように、本学を主体的に選択した者が比較的多く含まれることから、東京、大阪、近畿は第4象限、意欲高―不安低の平面に位置したものと考えられる。そして両地域群の中間に、沖縄が位置することがわかった。

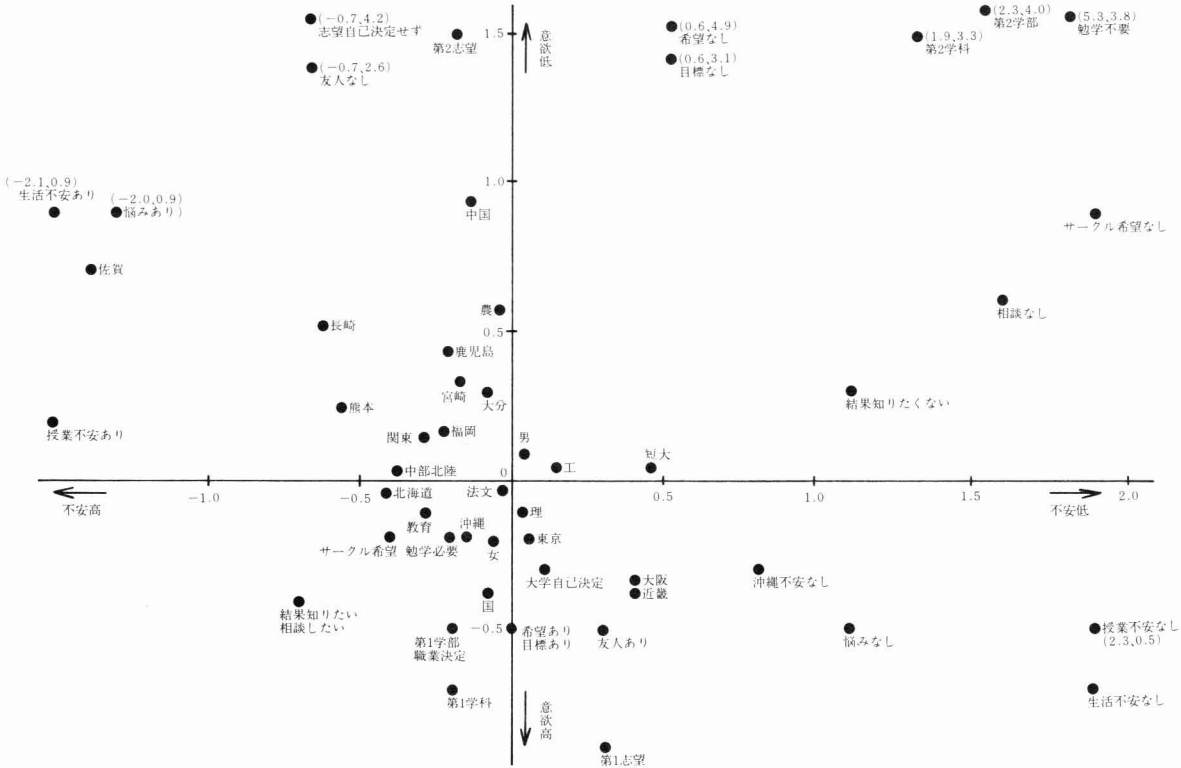

図15　学部、出身地、性別の分析

⑵　病歴項目について

前項同様の数量化の手続を行ない、質問項目Ｑ１～Ｑ６の病歴や問題傾向の要因について分析したものが図16である。問題ありとの回答は意欲の軸の左側に分布し、問題なしの回答は右側、しかもほとんど原点近くに分布した。特に「精神病にかかったことがある」「ノイローゼにかかったことがある」と回答した者は原点からかなり離れた第２象現に位置し、その他の問題を持っていた者よりはるかに意欲減退傾向と高不安感を有することが示唆された。精神病の項目で問題ありと回答した者５名、ノイローゼの項目では17名と、全学生数とくらべると非常に少ない人数ではあるが、新しい環境に適応する不安、学業についていけるが、友人はできるか等に関する悩みを有するものと考えられる。彼らのプライバシーを尊重しつつ、有効な援助を組織的に計画する必要があろう。

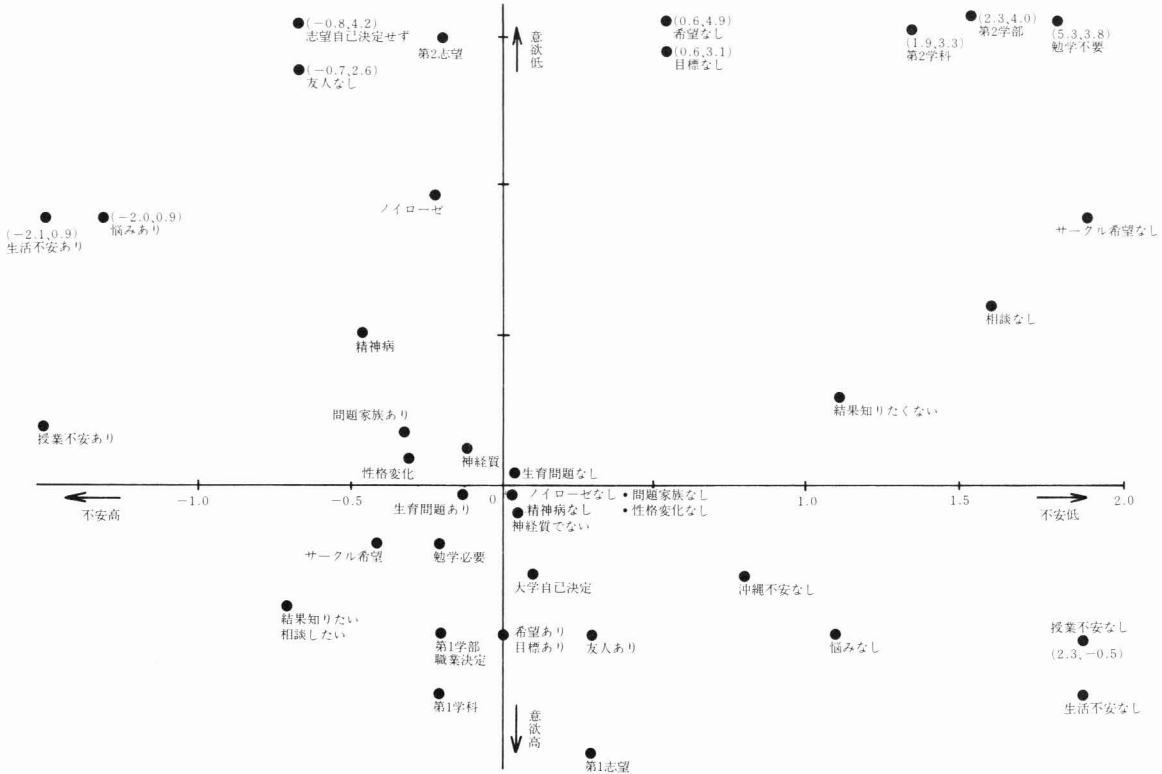
意欲低
意欲高
不安高
不安低
−1.0
−0.5
0
1.0
1.5
2.0
(−0.8,4.2)
志望自己決定せず
第2志望
(−0.7,2.6)
友人なし
(0.6,4.9)
希望なし
(0.6,3.1)
目標なし
(2.3,4.0)
第2学部
(1.9,3.3)
第2学科
(5.3,3.8)
勉学不要
ノイローゼ
(−2.1,0.9)
生活不安あり
(−2.0,0.9)
悩みあり
サークル希望なし
相談なし
精神病
結果知りたくない
問題家族あり
授業不安あり
性格変化
神経質
生育問題なし
ノイローゼなし
問題家族なし
性格変化なし
生育問題あり
精神病なし
神経質でない
サークル希望
勉学必要
大学自己決定
沖縄不安なし
結果知りたい
相談したい
第1学部
職業決定
希望あり
目標あり
友人あり
悩みなし
授業不安なし
(2.3,−0.5)
第1学科
生活不安なし
第1志望

図16．病歴の分析

2）不安、心気症項目

Q22～Q35の不安と心気症に関する質問項目を数量化理論Ⅲ類で分析した結果、意味のあると思われる3つの軸が抽出された。

第1軸は「いつも何かと心配ごとがある」、「ちょっとしたことがすべて気になって気づかれする」、「はっきりした原因がないのにいろいろのことが不安になる」、「いつも緊張していらいらする」、「人の言動が気にさわっていらいらする」、「ちょっとしたことがカンにさわっていらいらする」という項目に高い負荷を示しているところから≪神経症的不安≫に関する軸と命名した。第2軸は「自分の体や病気にことに非常に関心をもっている」、「自分の健康のことが心配で仕方がない」、「日によって体の悪いところが変動する」、「その時の気分によって症状が良くなったり悪くなったりする」等の項目に高い負荷を示しているところから、≪不安の身体化≫に関する軸と命名した。第2軸は心気症的傾向の軸とも命名できるがあえて≪不安の身体化≫の軸と命名した理由については、第1軸と第2軸によるプロット図の説明のところで述べることにしよう。

第3軸は「ひとりで外出するのが不安である」、「こわいニュースを見聞するとひどくおびえる」、「いつもそわそわして落ちつかない」、「物音にひどく敏感である」等の項目に高い負荷を示しているところから、≪不安の外在化、顕在化≫に関する軸と命名した方が妥当であろう。以上の項目は恐怖症を連想させるが、しかし、恐怖症は特定の対象に集中する傾向があるところから不安の外在化、顕在化と命名した。

次に第1軸と第2軸の各々に、デモグラフィック要因、病歴、大学適応項目などがどのようにかかわっているかを示したのが図17～図19である。

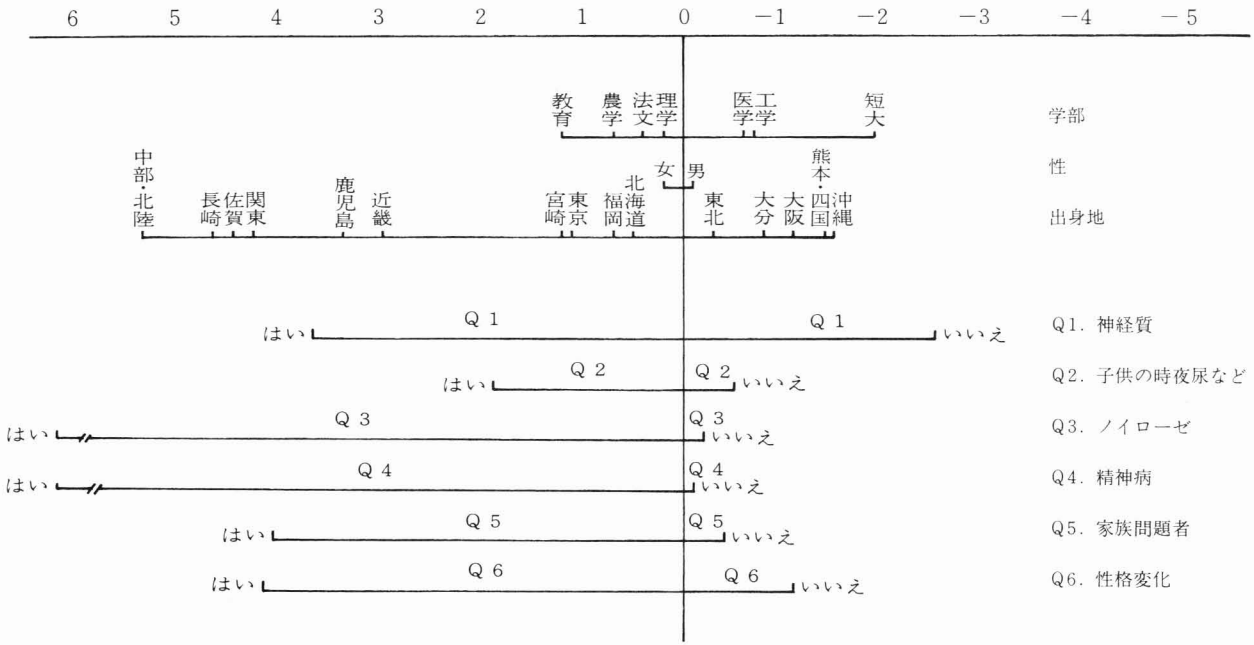

図17. 第1軸とデモグラフィック要因、病歴項目の平均値

まず図１について検討していくと、学部別では教育学部、農学部が第１軸で高い値を示し、その対極に短大部が位置していることがわかる。出身地別では、大分、熊本を除く九州各県が第１軸で高い値を示し、その対極に沖縄が位置している。性別では女子が第１軸に関与しているが、それほど高い値ではない。農学部が≪神経症的不安≫の軸に関与していることは新里・大城（1986）の結果―農学部は琉大志向消極・実利主義否定型である―からも肯づけることであり、また、教育学部が同軸に関与しているのは、最近の教員採用率の減少の傾向を反映していることもその一因であろう。そして先に示した九州出身者、あるいはその他の県外出身者が≪神経症的不安≫に高く関与しているのは、その大部分が琉大への第二志望者であり、どちらかというと自信が欠如し、それに加えて初めての沖縄での生活、初めての大学生活などの不安が加味されているものと思われる。次いで第１軸への病歴のかかわりについて検討していくことにする。病歴に関する６つの項目、神経質、子供の時の夜尿など、ノイローゼ、精神病、家族に性格問題者、性格変化はすべて第１軸≪神経症的不安≫に高くかかわっている。特に、「ひどいノイローゼにかかったことがある」、「精神病にかかったことがある」という２つの項目は第１軸で高い値を示しているところから、第１軸は状態不安ではなく、特性不安に強く関係していることを示している。このように、第１軸の≪神経症的不安≫は、県外出身者、病歴と結びついていることが明らかになったが、大学適応項目ではどのような特徴を示すであろうか。図18は第１軸の≪神経症的不安≫での大学適応項目の値をプロットしたものである。図18での特徴的な結果は、「第一志望でない」、「希望ある進学でない」、「志望校の自主的決定でない」、「学生生活、沖縄、授業不安のある」、「友人できない」、「悩みあり」、「入学後の目標なし」などが第１軸の≪神経症的不安≫に強く関係していることであろう。以上の結果から考えると、≪神経症的不安≫の強い学生に対して、どのようにして自己の目標をもたせ勉学させていくかが重要な問題となっていくであろう。

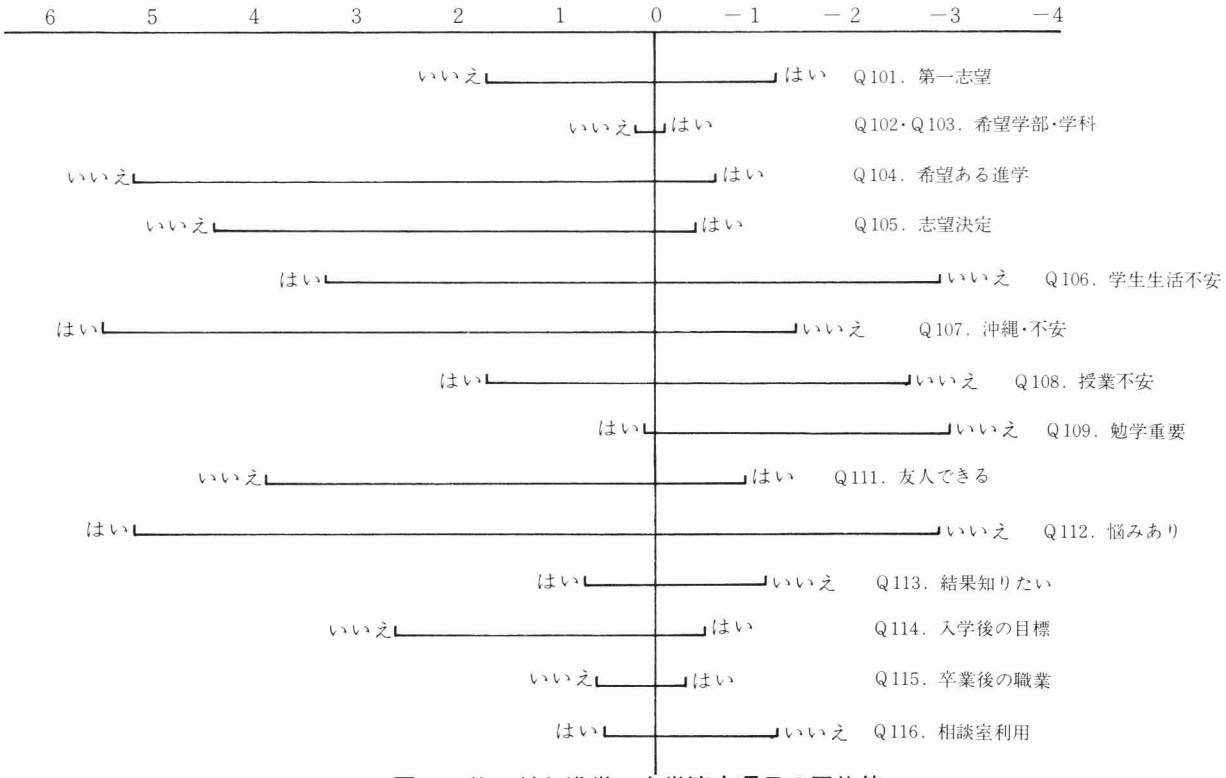

図18．第1軸と進学・大学適応項目の平均値

図19は第２軸≪不安の身体化≫に高い値を示すデモグラフック要因、病歴、大学適応の項目の特徴的なものを選び出したものである。学部別では、短大部、医学部が高い値を示し、≪神経症的不安≫で高い値を示した農学部がその対極に位置している。出身地別では、東北、北海道、東京、鹿児島が≪不安の身体化≫の軸で高い値を示している。病歴の項目でこの軸に関係しているのはノイローゼと精神病であり、その他の病歴の項目はほとんど関係を示していない。大学適応項目では全体的に強く≪不安の身体化≫に関係していないが、「希望ある進学」、「授業不安」、「友人できる」、「入学後の目標」、「相談室利用」などへの肯定的反応がわづかながら関係しその否定的反応は≪不安の身体化≫に高い負の値を示しているところから、この≪不安の身体化≫傾向がないということは自己の不安感情を隠蔽する傾向のあることがうかがえる。

ここで、第１軸≪神経症的不安≫の軸と第２軸≪不安の身体化≫の軸の組み合せによる不安、心気症項目の特徴について検討していくことにする。図20は、第１軸と第２軸の組み合せによる各項目の位置をプロットしたものである。図より３つのグルーピレグが可能である。すなわち、両軸の原点あたりに位置するのが不安も恐怖も弱い「心身の健康」のグループであり、第２象限に位置しているのが不安の存在を隠蔽し自覚できない「不安神経症的傾向」のグループである。そして第１象限に漠然とした形で位置しているのが、不安を持ちかつ身体化している「心気症的傾向」のグループである。先に第２軸を≪不安の身体化≫の軸と名づけたのは、心気症が神経症的不安の軸とも強く関係しているからである。

以上、不安、心気症を中心として数量化理論Ⅲ類による分析結果を述べてきたが、ここでいう≪神経症的不安≫とは一体何なのか、その具体的内容は大学適応に関しては明らかにされたが、病歴に関する具体的要因については本調査の結果からは知ることができなかった。おそらく発達に関する要因であることは推測できるが、その内容を明らかにすることはこのような特徴、傾向を示す学生の就学指導において重要な役目をもち、今後の検討課題として残っている。

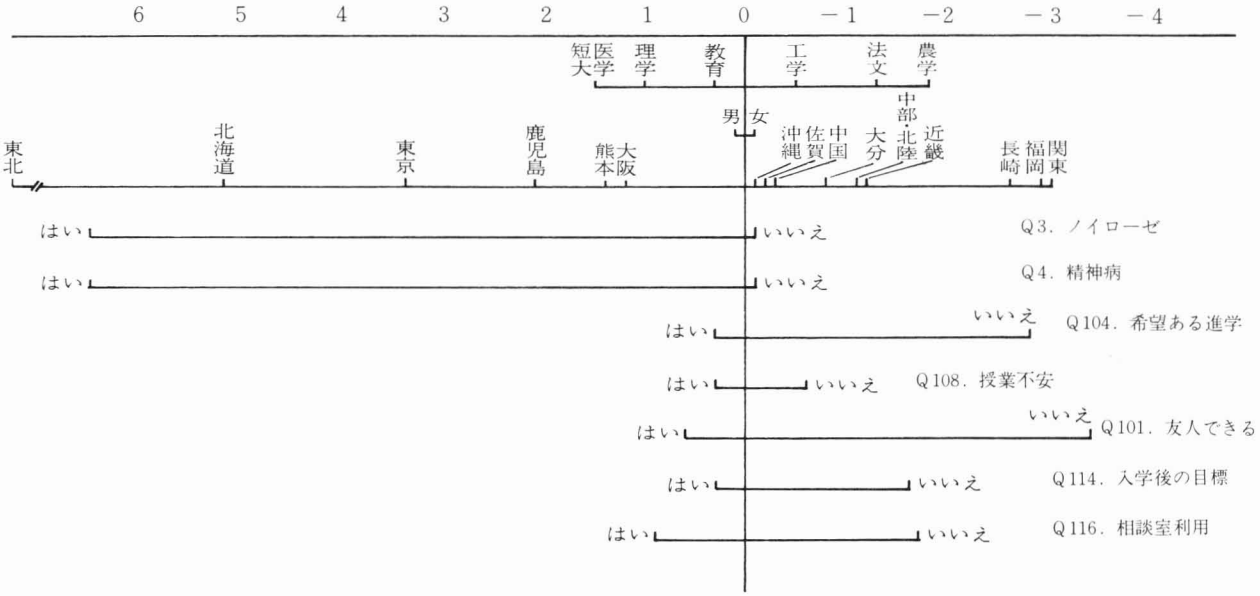

図19. 第2軸とデモグラフィック要因、病歴、進学・大学適応項目平均値

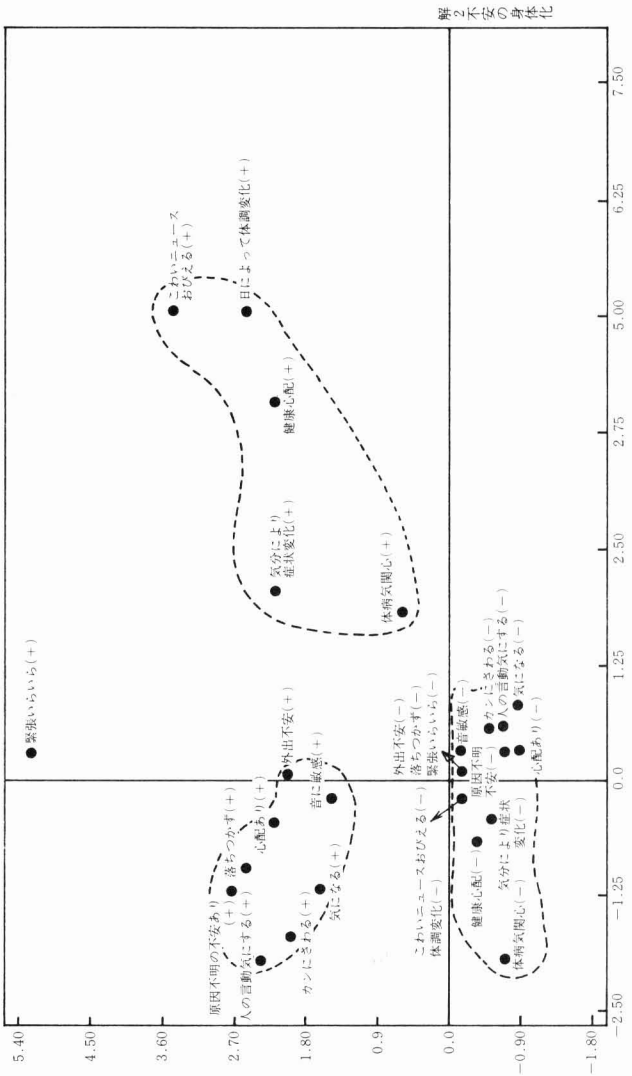

図20. 第1軸と第2軸による不安、心気症項目のプロット図

3）身体・心身症に関する項目の分析

(1) 消化器系機能に関連する項目について

身体・心身症に関する項目の中から、項目65、66、78、79、80、81、82、83、84、89の10項目について、数量化理論第Ⅲ類を用いて分析したところ、第1軸に有意味な項目の配置が見られた。この第1軸には、「よく吐き気がしたり、吐いたりする」、「いつもあまり食欲がない」、「いつも胃がもたれたような感じがある」、「よくのどのつまる感じがする」、「よく腹が痛む」等の項目が高い負荷を示している。そこで、この軸は≪消化器系不調感≫の軸と呼ぶことにする。第2、3軸には特に意味のある項目の配置は見られなかった。

つぎに≪消化器系不調感≫の軸に、入学生の性、学部、出身地等がどのように関わっているかを示したのが図21である。図21において、性別について見ると、若干ではあるが女子の方が男子に比べ、消化器系の不調感を否定し、消化器系機能の好調に示している。同様に、入学生の学部別について見ると、理学部、教育学部、農学部、法文学部、工学部等の学生は、短期大学部や医学部の学生に比べ、消化器系不調感を肯定している。そして、短期大学部の学生が、最も自己の消化器系機能の好調を認知していることが分かる。入学生の出身地と軸との関わり方を見ると、佐賀、関東、大阪、鹿児島、長崎、北海道の各出身学生は、この順位で消化器系の不調感を肯定する傾向が強い。一方、大分、東北、熊本、中国、沖縄の各出身学生は、対極の否定方向の位置にあり、自己の消化器系の機能をより健康的に捉えている。なお、図21において、≪消化器系不調感≫の軸に最も関係している要因は順に出身地、学部、性となっている。

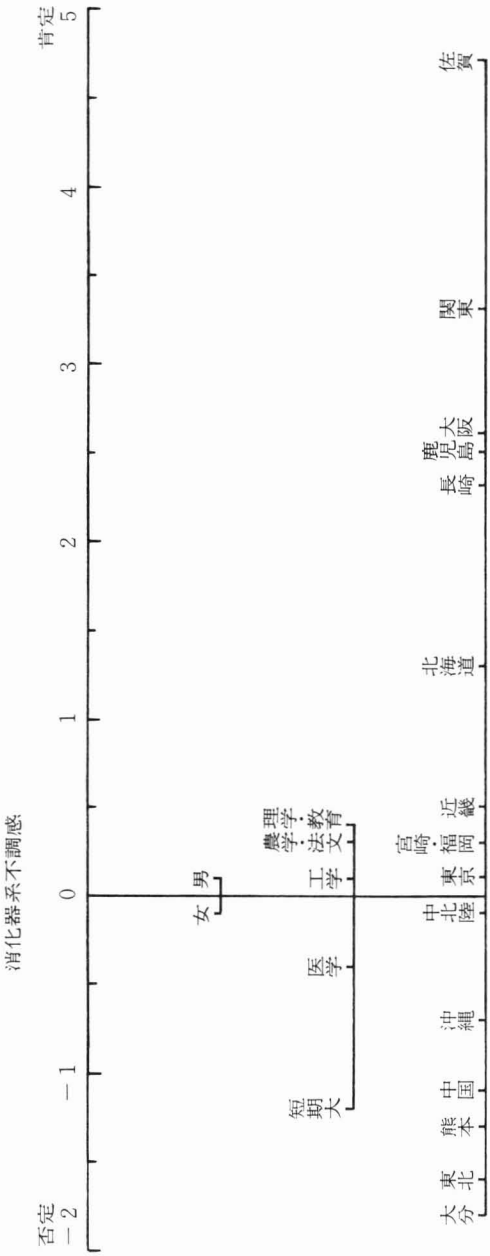

図21．消化器系不調感の軸とデモグラフィック要因との関係

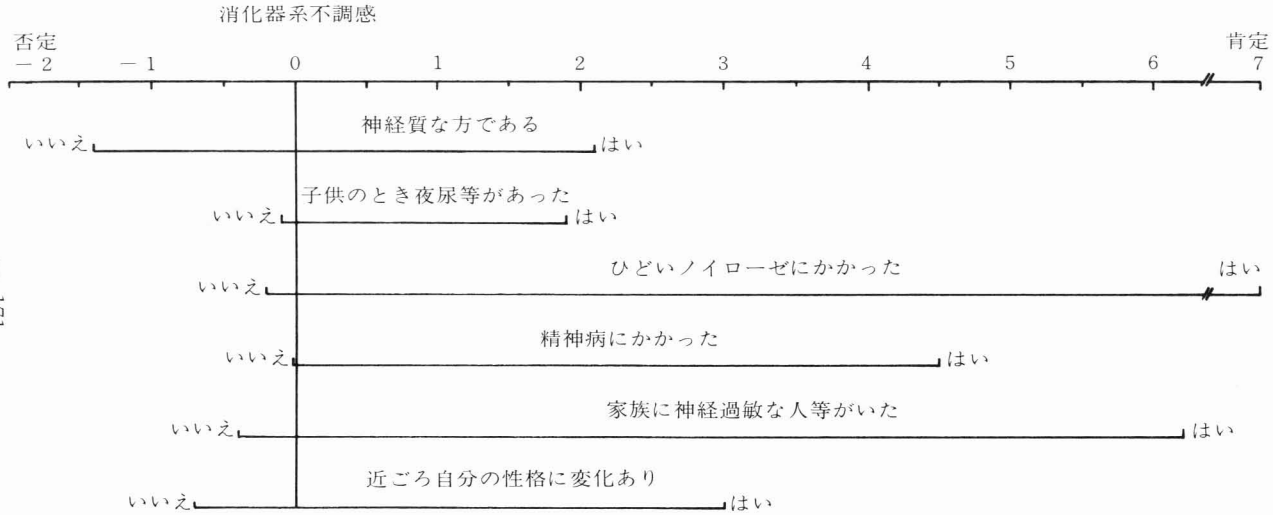

図22．消化器系不調感の軸と病歴項目との関係

図22は、同様に≪消化器系不調感≫の軸に病歴に関する項目１～項目６がどのように関わっているかを示したものである。「ひどいノイローゼにかかった」、「家族に神経過敏な人等がいた」、「精神病にかかった」等の項目が最も軸に関わっている。さらに、これらの項目に肯定的に回答した学生ほど、消化器系の不調感を訴えている。「神経質な方である」、「近ごろ自分の性格に変化あり」の項目に否定的回答をしている学生ほど、自己の消化器系の不調感を否定している。

図23は、≪消化器系不調感≫の軸に、大学適応に関する項目101～項目116がどのように関わっているかを示している。「今何か悩み事がある」、「学生生活に不安を感じる」、「沖縄という風土に不安を感じる」、「大学には希望を持って進学した」、「友人はすぐできると思う」等の項目が、軸に強く関わっている。逆に、軸との関わりが弱い項目として、「サークルに入りたいと思う」、「希望した学部に入学した」、「希望した学校に入学した」、「学生生活で勉学は重要だと思う」等が、挙げられる。大学に入学した学生にとって、悩みをもたず、学生生活や居住環境に不安をいだかず、大学に希望を持ち、友人関係に積極的構えをいだく、こと等が彼等の消化器系機能の好調感や十全感をもたらす要因になると解釈される。そこで、大学生の消化器系機能の好調感、不調感の程度を知る事によって、彼等の大学適応の状況をある程度まで理解することが可能になる。

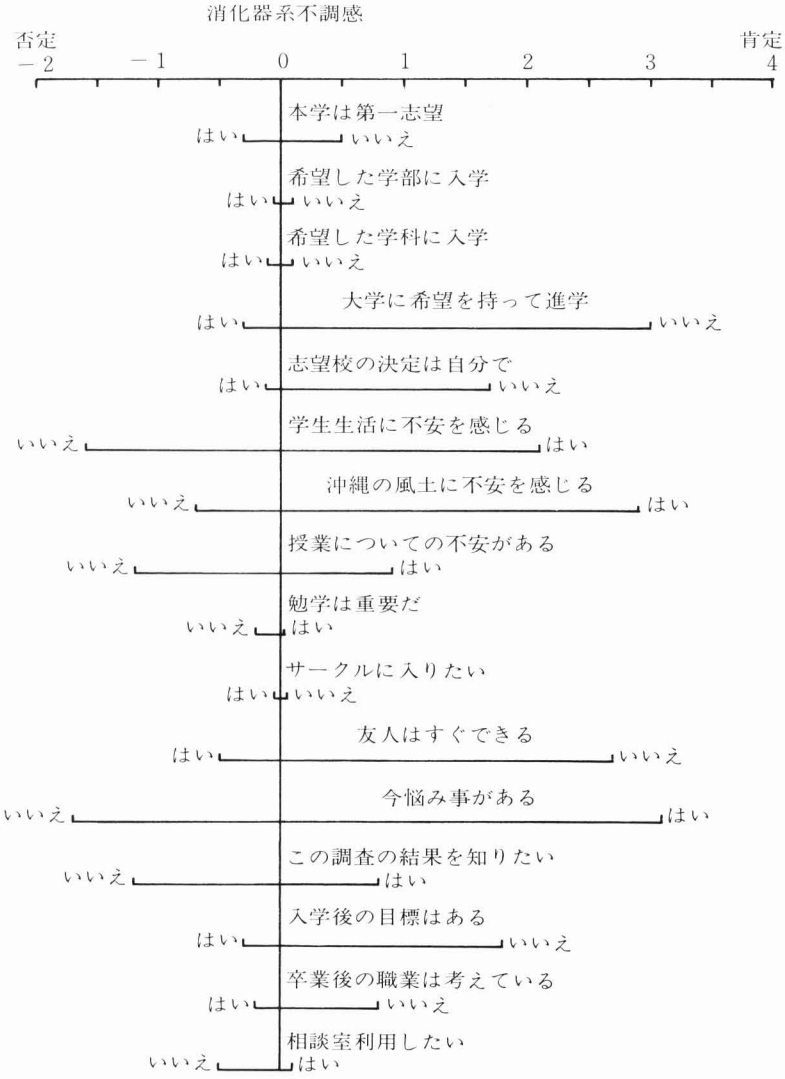

図23．消化器系不調感の軸と大学適応項目との関係

(2) 循環器系機能に関連する項目について

質問項目64、67、68、69、70、71、72、73、74、75の10項目について、数量化理論第Ⅲ類を用いて分析した結果、第１軸に有意味な項目の配置が見られた。すなわち、第１軸には「脈が急に早くなったり、狂ったりする」、「胸を圧迫されるようで苦しい」、「よく息苦しくなる」、「よく動悸がする」、「急に体がかっと熱くなったり、寒気がしたりする」等の項目が高い負荷を示している。そこで、この軸を≪循環器系不調感≫の軸と命名する。なお、第２、３軸には特に意味のある項目の配置は見られなかった。

≪循環器系不調感≫の軸に、入学生の性、学部、出身地等がどのように関わっているかを示したのが図24である。図24において、性別について見ると、男子に比べ女子が若干循環器系の不調感を肯定している。入学生の学部別と軸との関わり方を見ると、理学部、教育学部、工学部等の学生はこの順で、循環器系機能の不調感を肯定している。反面、短期大学部、農学部、医学部、法文学部等の学生は、循環器系の不調感を否定し、この器官系の機能の好調を示唆している。つぎに、入学生の出身地と軸との関係構造を見ると、大阪、熊本、鹿児島、関東、北海道、宮崎、中北陸の各出身学生は、この順位で循環器系の不調感を肯定する傾向が強い。一方、福岡、大分、東京、佐賀、東北、沖縄の各出身学生は、軸の否定の方向の位置にあり、自己の循環器系の機能をよりポジテイヴに認知している。図24において、≪循環器系不調感≫の軸に最も関係している要因は、順に出身地、学部、性となっている。なお、消化器系不調感の軸と３要因との関係（図21）に比べ、≪循環器系不調感≫の軸とこれら３要因との関わりはより強いと解される。

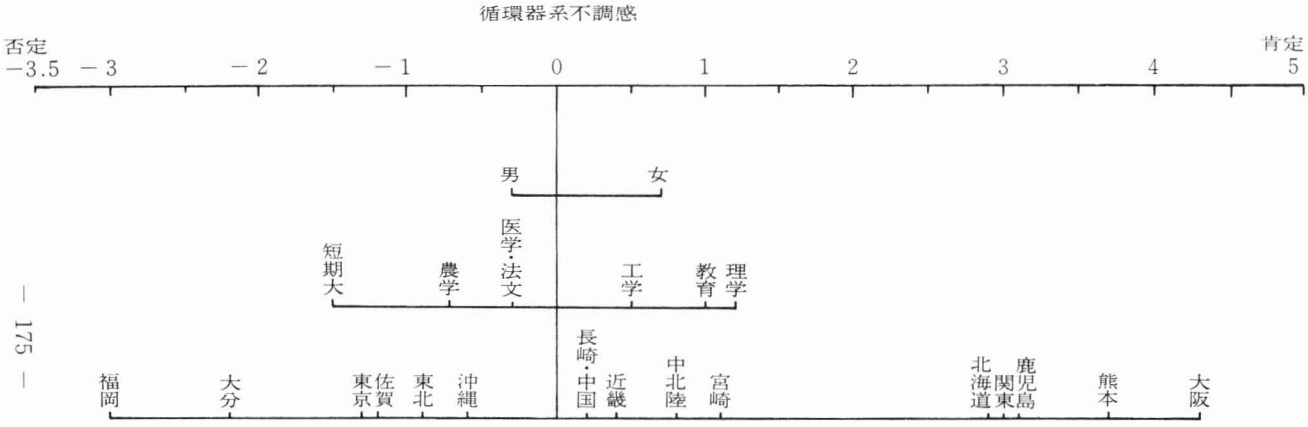

図24. 循環器系不調感の軸とデモグラフィック要因との関係

図25は、≪循環器系不調感≫の軸に、病歴に関する項目１～項目６がどのように関わっているかを示したものである。「精神病にかかった」、「ひどいノイローゼにかかった」、「家族に神経過敏な人等がいた」等の項目がこの順で軸に関わっている。そして、これらの項目に肯定的に回答した学生ほど、循環器系の不調感を訴えている。また、「神経質な方である」の項目に「いいえ」と回答している学生ほど、循環器系の不調感を否定している。

図26は、≪循環器系不調感≫の軸に、大学適応に関する16項目がどのように関わっているかを示している。「今何か悩み事がある」、「沖縄の風土に不安を感じる」、「大学には希望を持って進学した」、「この調査の結果を知りたい」、「学生生活に不安を感じる」等の項目が、軸に強く関わっている。反面、軸との関わりが弱い項目として、「サークルに入りたい」、「志望校の決定は自分でした」、「希望した学科に入学した」、「希望した学部に入学した」等が挙げられる。このような軸と各項目との関係構造の結果から、大学生の循環器系機能の好調感、不調感は、彼等の大学適応の状態を知るうえで有効な指標となり得ることが指摘される。

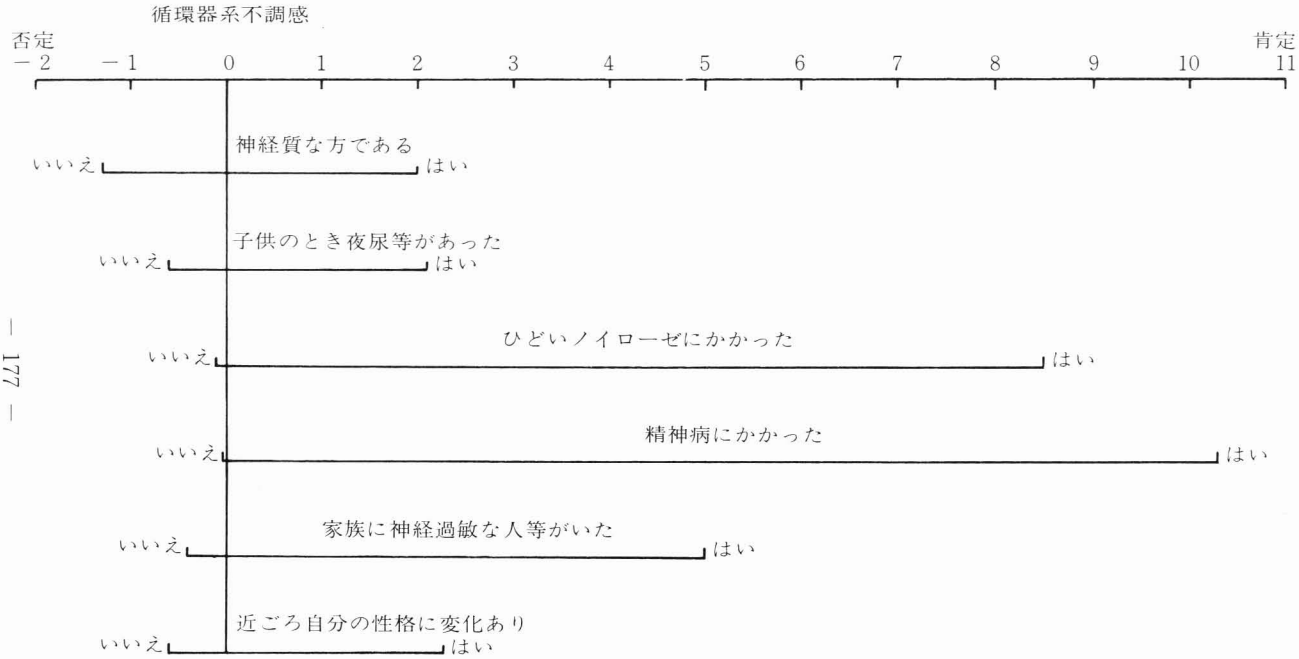

図25. 循環器系不調感の軸と病歴項目との関係

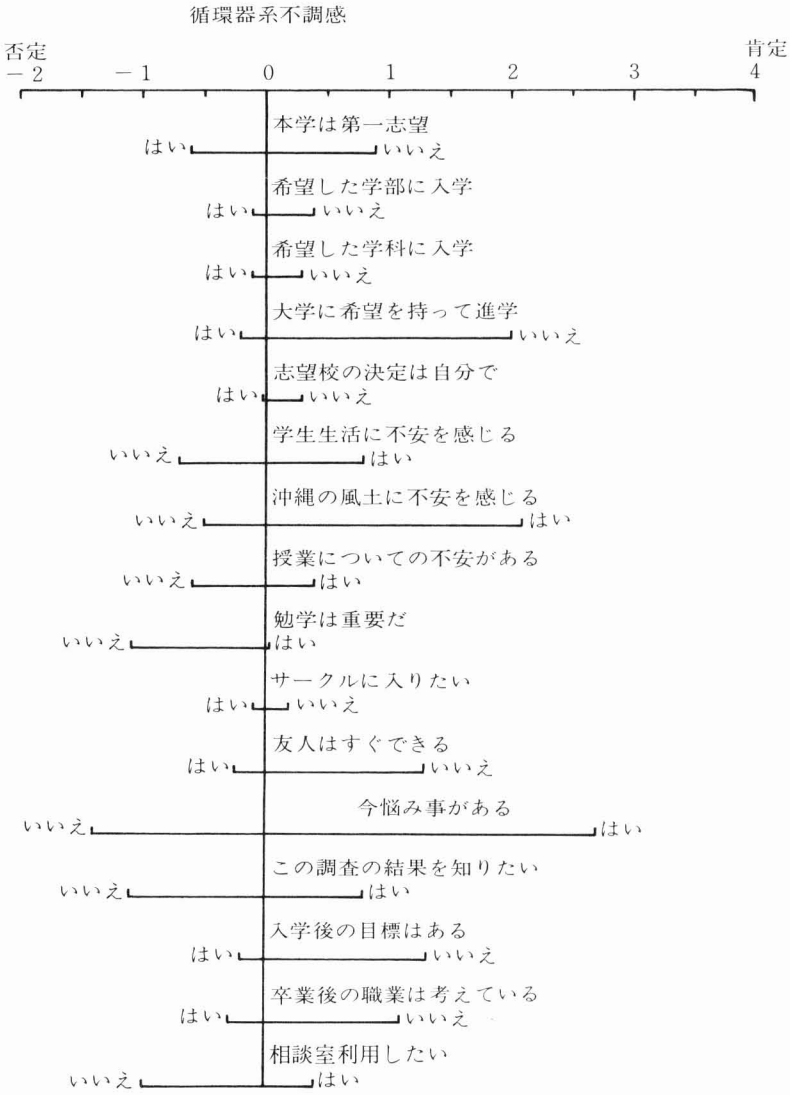

図26．循環器系不調感の軸と大学適応項目との関係

Ⅳ 要 約

本研究の主な結果は次のとおりである。

1、全体的結果の傾向

新入生は、精神・身体項目において、自信のなさ、自己中心性、健康への関心、疲労感などに肯定的回答傾向が見られる。琉大を第1志望とした学生は60.1%であるが、ほとんどの学生は希望した学部（87.7%）、学科（82.6%）に入学している。このような結果から、学生は専門性を重視して大学を選択していると思われる。ところが、半数近くの学生は授業（57.3%）や学生生活（43.8%）に不安を感じており、しかも16%の学生は入学後の目標がないと回答している。

2、デモグラフィック要因による分析

1）性別比較

①男子学生は女子学生に比べ琉大を第1志望校として選択する割合が低いが、しかしある程度まで希望した学部、学科に入学している。一方、女子学生の場合概して琉大を第1志望校としており、また希望した学部、学科に入学している。

②男子に沖縄県外出身者の割合が多いためか、「沖縄という風土に不安を感じる」の回答率が女子に比べ高い。

③男女学生とも大学生活に対する両価性的態度を持つが故に、相談室を利用したい、という学生が6割以上も出現している。

④病歴に関し、女子学生に比べ男子学生の方が自己をネガテイヴに認知していることが示唆される。

⑤女子学生は男子学生に比べ状態不安を示す傾向があり、他方、男子学生は特性不安を示す傾向が見られる。

⑥男子学生は女子学生に比べ、関心や恐怖、強迫の対象を自己に向けやすく、一方、女子学生はこれらの対象が外界の事柄と結びつきやすい。

2）学部別比較

①琉大を第1志望校として、選択する割合は短大部、医学部、法文学部の順に高く、逆に農学部、教育学部の順に低くなっている。

②全学部とも全体的に高い率で希望した学部（95.1％～70.9％）、学科（93.7％～68.8％）に入学したと回答している。その中で肯定率の低いのは農学部、短大部である。

③農学部、教育学部は他の学部に比べ、沖縄の風土に不安を感じる割合が高い。

④大学の授業に不安を感じる、という回答率は教育学部、医学部、農学部が他の学部より高い。

⑤農学部、教育学部は他の学部に比べ、「心配ごと」、「気づかれ」、「落着かない」等の項目の肯定率が高く、不安傾向の高いことが示される。この両学部は琉大を第1志望校として選択する割合がもっとも低かった。また短大部は不安傾向がもっとも低く、琉大を第1志望校とする割合が一番高かった。

⑥劣等感をもっとも強く感じているのは農学部、教育学部であり、逆に弱く感じているのは工学部、短大部である。

3）出身地域別による比較

①出身地域別に琉大を第1志望校とした割合は、沖縄県出身者がもっとも高く（82％）、九州以外の本土出身者（53％）、九州出身者（19％）の順になっている。

②各学部における県内出身者の割合、すなわち地元率を見ると、もっとも高いのが短大部（97.2％）、法文学部（72.0％）であり、逆に低いのは農学部（29.2％）、教育学部（48.8％）である。

③九州出身者は沖縄出身者と比較して、大学という新しい環境や沖縄という風土に不安を感じている。

④九州出身者は沖縄出身者に比べ、精神的・身体的な両面において不安定な状態にあると考えられる。

4）第1志望と第2志望別の比較

①第２志望群は第１志望群に比べ、ヒステリー項目、不安項目、抑うつ項目、心身症項目、への回答率が高かった。

②第１志望群は第２志望群に比べ、大学適応良好を示唆する反応が多かった。

３、変数間関係の構造分析

１）大学適応項目の分析

≪意欲高―意欲低≫、≪不安高―不安低≫の２軸の交差によってできた４平面上の関連要因の布置結果から、意欲の軸で高の方に医学部、低の方に農学部が位置する。また不安の軸については、高の方に教育学部が、低の方に短大部がそれぞれ位置している。つぎに男女差について比較してみると、男子より女子の方がやや意欲高の傾向が見られ、不安の軸に関しては性差はほとんどなかった。地域についてみると、九州各県は全て意欲低、不安高の第２象現に分布し、沖縄は第３象現に、そして東京、大阪、近畿は第４象現にそれぞれ分布している。

２）不安、心気症項目の分析

不安と心気症に関する項目を数量化理論Ⅲ類で分析した結果、次の３つの軸が抽出された。第１軸は≪神経症的不安≫に関する軸、第２軸は≪不安の身体化≫に関する軸、第３軸は≪不安の外在化、顕在化≫に関する軸である。

第１軸と学部との関係をみると、教育学部、農学部がこの軸で高い値を示し、対極に短大部が位置している。また出身地域との関係をみると、大分、熊本を除く九州各県が高い値を示し、沖縄は低い値を示している。この軸と病歴に関する項目とが強く結びついていることも明らかになった。さらに、大学適応項目との関係をみると、「第１志望でない」、「希望ある進学でない」、「志望校の自主的決定でない」、「学生生活・沖縄・授業不安ある」、「悩みあり」等が第１軸で高い値を示している。

第２軸と他の変数との関係を見ると、学部別では短大部、医学部が高い値を示し、農学部は低い値を示している。出身地別では、東北、北海道、

東京が高い値を示している。大学適応項目について見ると、「希望ある進学」、「授業不安」、「友人できる」、「入学後の目標」などの肯定的反応がわずかに軸の正の値と関係している。

第3軸と他の変数との間には有意味な関係は見られなかった。

3）消化器系項目の分析

ここでは≪消化器系不調感≫の軸が抽出された。短期大学部、医学部の学生は自己の消化器系機能の好調を認知し、理学部、教育学部、農学部、法文学部、工学部は消化器系不調感を肯定している。軸と出身地との関わり方を見ると、大分、東北、熊本、中国、沖縄の各出身学生は不調感を否定し、逆に佐賀、関東、大阪、鹿児島、長崎、北海道の学生はこの順で肯定する傾向が強い。また、ほとんどの症歴項目は軸の肯定的方向と強く関連している。大学適応に関する項目との関係を見ると、「学生生活に不安を感じる」、「沖縄の風土に不安を感じる」、「今悩み事がある」、「大学進学に希望を持ってない」、等の項目が軸の肯定的方向と強く結びついている。

4）循環器系項目の分析

≪循環器系不調感≫の軸が抽出され、この軸とデモグラフィック要因との関わり方を見ると、男子に比べ女子が若干循環器系の不調感を肯定している。学部との関係において、理学部、教育学部、工学部はこの順で軸の肯定的方向と関係し、他方、短大部、農学部、医学部、法文学部は否定的方向と関係している。また、出身地別に見ると、大阪、熊本、鹿児島、関東、北海道は肯定的方向に位置し、逆に福岡、大分、東京、佐賀、東北、沖縄は否定的方向に位置している。病歴項目は軸の肯定的方向と強く関連している。また、大学適応項目との関係を見ると、「今悩み事がある」、「沖縄の風土に不安を感じる」、「大学進学に希望を持ってない」、「入学後の目標はない」、「友人はすぐできない」等の項目が軸の肯定的方向と強く結びついている。

V　おわりに

安藤（1986）は学生相談室会議において、九州各県の出身者の九州大学工学部における留年生の実態を報告している。それによると鹿児島県出身者の留年率がきわめて高く（昭和53年～55年の平均で約60％）、その要因として国立大学への現役進学志向性の高さ、実質的全県１学区的状況による特定の進学校の成立、補習授業による能力の底上げ効果などを指摘している。受験中心であった高校生活から解放され、人生の一時期をモラトリアム的に自己の在り様を問うことは、有意義であろう。しかし大学進学者の半数以上が留年するという事実は、大学進学に関して何らかの教育的配慮不足、あるいは進路指導上の問題が存在するものと考えられる。九州大学の調査は留年生の実態調査であり、本研究は新入生の意識調査であることから、データの質が異なり単純には比較できない。しかし学生の適応上の問題という視点から見ると、共通の問題が浮び上ってくる。本学の不本意入学者は、不安感、敗北感、挫折感が強く、大学に対する所属感や親近感を持ちにくい状態にあるものと考えられる。それに対し九州大学の留年生は、大学合格という目標達成後の虚脱感、目標喪失、あるいは息切れ現象といった特徴を有するのではなかろうか。いずれにしろ、根定には、進学者の適性や個性についての配慮が充分でなく、偏差値中心の進路決定という問題が共存するものと思われる。しかしながら単に個性尊重の進路指導を高校側に期待するだけでは、問題の根本的解決には結びつかないと思われる。入試制度の改革を含め、大学側も積極的な対応を計画する必要があろう。

60年度入学者の健康、適応調査を行ったところ、九州出身者に不本意入学者が多く、精神・身体項目の多くで沖縄出身者より問題ありと回答する者が多く、少なくとも本調査実施時では心身とも不安定な状態にあることがわかった。このような状態がどの程度持続するのか、留年や退学、また成積不振などとの関連はあるのかどうか、今後さらに調査を進めていきたいと考えている。

参考文献

安藤延男（1986）学生相談会談　蔵王シンポジウム（口頭発表）

士川隆史（1984）不本意入学をめぐる問題学生相談会議　京都シンポジウム　抄録29－32

鶴　光代（1981）学生相談からみた大学進学に関する問題点――福岡教育大の事例から――学生相談会議　九州シンポジウム　抄録　49－52

新里里春・大城宜武（1986）琉大生の学生調査結果の統計的考察　沖縄心理学研究第９号

琉球大学学生部（1986）昭和60年度学生生活実態調査報告書

〔付　表〕

調査票の質問内容と回答率

※：χ^2検定（d f ＝ 2、P＜.05）で男女間の回答率に有意な関連性のある項目

	男子	女子	全体
1）神経質な方ですか、人からそういわれますか。… ※	42.2	31.6	38.6
2）子供のとき、夜尿（小学生になってからも）、爪かみ、指しゃぶり、夜泣き、夜驚、夢遊（夜中にねぼけて歩きまわる）、どもり、かんしゃく、ひきつけなどがありましたか。……	22.3	21.9	22.2
3）ひどいノイローゼにかかったことがありますか。…※	2.3	0.0	1.5
4）精神病にかかったことがありますか。……	0.7	0.0	0.4
5）家族に神経過敏な人、ひどいはにかみや、憂うつ症の人、変人、大酒家、ノイローゼや精神病の人、自殺した人がありますか（もしもあれば、上のどれかに○印をつけて下さい。……	4.8	5.7	5.1
6）近ごろ自分の性格に変わってきたところがありますか。……	21.0	18.3	20.0
7）恐い夢をよくみますか。……	6.8	8.9	7.5
8）不平や不満が多い方ですか。……	21.8	15.9	19.8
9）対人関係（人づきあい）がへたな方ですか。……	36.9	33.9	35.9
10）何事によらず相談相手がほしいと思いますか。… ※	57.4	65.0	60.0
11）自分の思うようにならないと、いらいらしたり、カッとなったりしますか。……	46.7	42.6	45.3
12）自分のやったことに自信がもてない性格ですか。…※	38.4	49.6	42.2
13）ゆうずうがきかぬ方ですか。……	21.6	24.3	22.5
14）感情をおさえることができず、すぐ表面に現わしますか。……	22.7	27.4	24.3

	男子	女子	全体
15）人や物に好き嫌いがはげしい方ですか。	27.8	25.3	26.9
16）暗示にかかり易い方ですか。	25.9	29.5	27.1
17）わがままなところがありますか。 ※	46.0	54.6	48.9
18）服装、好み、交際などで、ハデなことが好きですか。	10.7	8.1	9.8
19）よくいろいろなことを空想して楽しみますか。	57.1	60.3	58.2
20）すべて大げさに考えたり、反応する方ですか。 ※	19.7	13.6	17.6
21）自分を実際以上に立派にみせたがりますか。 ※	30.1	24.3	28.1
22）いつも何かと心配ごとがありますか。	29.7	29.0	29.4
23）ちょっとしたことがすべて気になって、気づかれしますか。 ※	32.8	39.4	35.1
24）はっきりした原因がないのに、いろいろのことが不安になりますか。	19.0	22.2	20.1
25）ひとりで外出するのが不安ですか。 ※	6.8	16.4	10.1
26）新聞やラジオでこわいニュースを見聞するとひどくおびえますか。 ※	2.4	6.3	3.8
27）いつもそわそわして落着きませんか。 ※	9.3	4.7	7.7
28）物音にひどく敏感ですか。	14.7	14.1	14.5
29）いつも緊張していらいらしていますか。 ※	4.8	1.3	3.6
30）人の言動が気にさわっていらいらしますか。	23.1	21.9	22.7
31）ちょっとしたことがカンにさわって腹が立ちますか。	22.2	22.2	22.2
32）自分の身体や病気のことに非常に関心をもっていますか。	54.3	49.6	52.7
33）自分の健康のことが必配で仕方がないですか。	15.6	13.6	14.9
34）日によって体の具合の悪いところが移動しますか。	6.1	6.3	6.2
35）そのときの気分によって、症状がよくなったり、悪くなったりしますか。	17.4	22.2	19.1
36）特定の病気にたいする恐怖心がありますか（その病気の名前は）。 ※	18.6	12.0	16.4

	男子	女子	全体
37) 特定の場所（高い所、暗い所など）にたいする恐怖心がありますか（どんな場所ですか）。	20.8	22.5	21.4
38) 特定の物（とがったもの、動物や虫など）にたいする恐怖心がありますか（それは何ですか）。 ※	20.1	28.7	23.1
39) 特定の状況（人の前で赤くなるなど）にたいする恐怖心がありますか（どんな状況ですか）。 ※	19.3	13.1	17.2
40) 自分の生活のしきたりが乱されると不安になり、気持が動揺しますか。	22.3	24.8	23.2
41) 自分でも馬鹿らしいと思いながら自分のやったことを、くり返したしかめないと落着きませんか。	34.7	37.6	35.7
42) 不快な考えがくりかえし頭にうかんできて、はらいのけることができませんか。	18.1	15.1	17.1
43) 自分の気持が人にわかってもらえず淋しいですか。 ※	17.0	23.2	19.1
44) 何をしても楽しくなく、気がめいりますか。	4.9	6.8	5.5
45) いつも不幸で憂うつですか。	1.9	0.8	1.5
46) 何をするにもおっくうで意欲がわきませんか。	7.9	6.3	7.3
47) 決断力がにぶっていて、あれやこれやと迷いますか。 ※	49.1	60.1	52.9
48) 人中に出るのが嫌いですか。	29.5	30.0	29.7
49) たえず罪悪感（自分が何か悪いことをしたような感じ）に悩んでいますか。	7.2	6.5	7.0
50) 将来に全く希望がないように思えますか。	5.3	3.9	4.8
51) いっそ死んでしまいたいとよく思いますか。	2.6	4.4	3.2
52) 自分が自分でないような感じがしますか。	7.6	8.6	8.0
53) まわりの人や物をみて、実感がわかぬ（現実感がない）ように思いますか。	11.3	11.2	11.3
54) 心を一つのことに集中できませんか。	18.0	15.9	17.3

	男子	女子	全体
55）劣等感が強いですか。	25.7	29.0	26.8
56）緊張したときに、ひどく汗をかいたり、ふるえたりしますか。	34.0	30.5	32.8
57）見知らぬ人に会ったり、知らぬ場所に行くと心配になりますか。 ※	34.3	42.8	37.2
58）目上の人が見ていると、仕事がさっぱりできなくなりますか。	15.8	19.6	17.1
59）よく病気する方ですか。	9.5	6.3	8.4
60）家族（一族）に病弱な人が多いですか。	5.4	6.3	5.7
61）体がだるくて疲れ易いですか。	22.7	25.8	23.8
62）よく全身の力がぬけたようになりますか。	6.8	5.5	6.4
63）仕事に根気がないようですか。	16.3	12.0	14.8
64）よく微熱がでるようですか。	6.5	8.4	7.2
65）いつもあたり食欲がないですか。	6.5	3.4	5.5
66）体がやせますか。 ※	11.0	6.3	9.4
67）よく動悸がしますか。	5.7	6.8	5.9
68）胸や心臓のところに痛みがありますか。	9.3	7.8	8.8
69）胸を圧迫されるようで苦しいですか。	1.8	2.1	1.9
70）脈が急に早くなったり、狂ったりしますか。	3.5	3.4	3.5
71）よく息苦しくなることがありますか。	3.0	4.2	3.4
72）急に体がかっと熱くなったり、寒気がしたりしますか。	8.0	6.0	7.3
73）急に汗の出ることがありますか。	12.7	11.5	12.3
74）顔や手足がよくむくみますか。 ※	1.5	4.7	2.6
75）手足がよく冷ますか。 ※	25.0	44.9	31.8
76）目が疲れやすいですか。 ※	49.7	58.5	52.7
77）よく耳鳴りがしますか。	10.2	8.6	9.7
78）口がカラカラにかわきますか。	8.7	7.8	8.4
79）よくのどのつまる感じ（あるいは食物がつかえるよ			

	男子	女子	全体
うな感じ）がしますか。	7.5	6.8	7.2
80）いつも胃がもたれたような感じがありますか。	9.7	7.6	8.9
81）よく吐き気がしたり、吐いたりしますか。	4.4	3.4	4.0
82）よく腹鳴りがしますか。 ※	12.5	19.8	15.0
83）よく下痢したり、便秘したりしますか。 ※	19.7	29.5	23.1
84）よく腹が痛みますか。	15.0	15.4	15.1
85）首、肩、背中がよくこりますか。 ※	32.5	47.0	37.5
86）方々の筋肉や関節にこりや痛みがありますか。	12.8	12.5	12.7
87）皮膚が敏感でまけやすいですか。 ※	22.0	31.9	25.4
88）よくほろせができますか。	1.1	1.3	1.2
89）昼間小便の回数が多いですか。 ※	12.8	5.7	10.4
90）月経のときに、ひどく気分や体の具合が悪くなりますか。 ※	1.1	30.0	11.0
91）月経は不順ですか。 ※	0.5	23.8	8.5
92）頭がぼんやりした感じがありますか。	18.4	19.1	18.6
93）頭痛や頭重感がありますか。 ※	10.9	16.7	12.9
94）目まいや、立くらみをよくしますか。	23.8	30.0	25.9
95）気が遠くなって倒れそうな感じによくなりますか。	3.8	3.9	3.8
96）今までに2回以上気を失ったことがありますか。	3.9	5.0	4.3
97）ひきつけの発作をおこしますか。	0.3	1.0	0.5
98）体のどこかにしびれ、麻痺、異常感などがよくおこりますか。	2.3	2.6	2.4
99）体のどこかによく痙攣がおこりますか。	2.7	1.8	2.4
100）睡眠はどうですか（寝つきがわるい。眠りが浅い。短かい。多夢。悪夢）	17.4	21.7	18.9
101）本学は第1志望の大学でしたか。 ※	54.7	70.5	60.1
102）希望した学部に入学しましたか。	86.9	89.3	87.7
103）希望した学科（課程）に入学しましたか。 ※	79.7	88.3	82.6

	男子	女子	全体
104) 大学には希望を持って進学しましたか。 ※	87.5	92.7	89.3
105) 志望校の決定は自分でしましたか。 ※	92.1	96.1	93.5
106) 学生生活に不安を感じますか。	43.0	45.2	43.7
107) 沖縄という風土に不安を感じますか。 ※	22.6	14.9	19.9
108) 授業についての不安はありますか。 ※	54.4	62.9	57.3
109) 学生生活で勉学は重要だと思いますか。 ※	95.4	99.0	96.6
110) サークルに入りたいと思いますか。	76.2	75.7	76.0
111) 友人はすぐできると思いますか。	81.8	86.7	83.5
112) 今何か悩み事がありますか。	34.7	33.7	34.3
113) この調査の結果を知りたいですか。 ※	56.1	64.8	59.0
114) 入学後の目標はありますか。	83.3	86.2	84.3
115) 卒業後の職業は考えていますか。 ※	74.4	81.5	76.8
116) 相談室を利用したいと思いますか。	62.6	68.7	64.7